

令和6年度補正予算 消費者の行動変容等による家庭系食品ロスの削減推進モデル事業

みんなでさがしてへらそう もったいない！！

たべもの救助隊

“食べものレスキュー大作戦”

事業報告書

特定非営利活動法人あそびとまなび研究所

2026年1月30日

目次

1.事業の目的	P01
2.事業内容	P02
3.実施体制	P05
4.事業の成果	P06
5.まとめと成果	P33
6.今後の課題	P34
7.事業の評価	P36
8.事業終了後の展開	P37
9.横展開へのポイント	P39

1. 事業の目的

- 食品ロスが家庭内で発生する**各フェーズに着目**し、消費者の意識や行動の変化を促すために、何が有効かを実践を通じて明らかにする。
- 子ども食堂やフードパントリー等の継続的な活動現場を持つ強みを活かし、**体験型の取り組み**を通じて多世代に食品ロスへの**認知のきっかけを創出**する。
- 実践の過程で得られた気づきや反応を整理し、今後、家庭系食品ロス削減の**取り組みを広げていくための基盤**をつくる。

子どもたち・市民自身が自分で動いて自分で気づく機会の創出

食品ロス
って知ってる？
認知状況の把握



たくさんあるよ！どう
やったら救い出せる？
みんなで工夫しよう
**たのしみながらみんなで
活動しよう**
出会いと提案



サルベージ&
レスキュー大作戦
考えてみてやってみよう
実践現場の提案
短期間 すぐできる
積み重ねる



みんなでできた！
知らなかったことに気づ
いたよ
変化もたくさんあったね

ひろげよう
つたえよう
つづけよう

子どもたちが仲間とめざすのぞましい未来

2 . 事業内容

家庭における食品ロスは、主に下記4つのフェーズに分類できる。各フェーズにおける認知の拡大と食品ロス削減を実践するために下記取り組みを実践する。

食品ロス発生のフェーズ	事業名	事業概要
フェーズ1：食品を手に入れる	1 サルベージクッキング	使い切れなかった食材、余っている食材をつかって、食事会を開催。家庭食材の棚卸し、調理法の共有。
↓		
フェーズ2：調理する	過剰除去検証クッキング	過剰除去の数値を計測し、現状と傾向を調査する。調理を通して過剰除去防止の知識を学ぶ。
↓		
フェーズ3：食べる	食べきりチャレンジ	子ども食堂などを通して、食べきりの工夫や食品ロスの重量の見える化を実践する。
↓		
フェーズ4：食後	コンポスト	小学校を中心に、コンポストの運用を実践する。実践を通して知識と手法を検証。参加した子供達などの変化を記録。
情報のアーカイブと発信	集計・ツール制作	上記活動にてアンケート実施。行動・意識の変容を掴む。また、ウェブサイト等の広報ツールを制作し、情報をアーカイブしていくと同時に、食ロス削減についての認知拡大を図る。事業を通して得た知見や実績を元に、ブックを作成。若年層へのアプローチを強化する。

2. 事業内容（詳細）

テーマ	内容	概要	結果
参加促進 認知向上	取り組みのお知らせ	活動会場 メルマガ HPなどで、活動を告知 周知の工夫 参加者を募る	・北九州市子ども家庭局発行「おすすめ体験活動情報誌『キッズチャレンジ』」（市内全小学生に配布）に告知 ・活動会場で対面で告知 団体HPで活動案内 ・知って参加してもらう工夫をし、参加あり。
発生実態 の調査	食品ロス発生経路のヒアリング調査	子ども食堂等の担い手や活動参加者等を対象に、活動会場において対面で食品ロスが発生する経緯や理由をききとり	多彩な世代の、活動実感に基づく声を聞くことができた。 子どもも、ユース世代も、しっかり回答している。 ペルソナの抽出と整理を実施。
	食品ロス世代別意識アンケート調査	食品ロスの発生要因、やってみたい取組、などについて調査 WEBアンケート、対面の聞き取り等実施	年代、というよりは、生活環境や知識、に関する違いが際立った。「 簡単ならやってもいい 」という回答が多数。
個別取組 の実証	子ども食堂食べきりチャレンジ	子ども食堂で食事の総重量を計測。 適正な量について、考える。	食べ残しが出ないようにする工夫、を、みんなで考えて実践した。楽しみながら無理なく取り組めた。
	サルベージクッキング	家庭などで、あまりかけたり、あまったりした食品を持ち寄り、みんなで調理方法を検討し調理し、実際に食べてみる。	大人編、若手編、を実施。助け合いや、交流が生まれ、お互い知らないことがたくさんあることがわかった。 世代を問わず、大変好評。
	過剰除去防止クッキング体験	普段あまり調理をしない人が「過剰除去防止」クッキングにチャレンジ	非常に効果がある。 とても楽しく、ためになり、美味しい活動となった。
	フードライブ・フードパントリー 啓発活動・意識調査	・イベント会場等で啓発活動を行う。 ・フードパントリーで配布されたものの食べ切り啓発と重量計測 ・過剰除去防止啓発と食品配布 ・コンポスト広報を行い サンプルの基材を配布し、調査協力を促す。	参加者（一般家庭、高齢者、大学生も対象）にアンケート参加を促し、「 できることや関心が増える 」様を可視化。 ちょっとわかると、たのしくなって、もっとやりたくなる、をみんなで共有。 コンポスト、は全く知らない人も多く、マイナスイメージが強いので、まずは、知ってもらう。
	コンポスト活動	竹100%の基材を使用したコンポストのモニター調査 小学校 高校 放課後等デイサービス 個人	小学校での取り組み（5年生2クラス、教員、校長室） 高校での取り組み（2校） 放課後等デイサービス（1事業所） 希望者にキットを提供し、実施状況調査
	SNS・HP広報	特設HPにて随時広報・アンケート参加を促す 取り組みの見える化 特設HPを案内するチラシ作成 クイズ募集	アンケート参加募集 ブログ・メルマガでの告知 活動会場でのデザイン物活用で食ロス認知度は向上
	子ども食べものだいじブックの制作	食品ロスについて、ドリルのように学ぶことができる冊子の作成（小学校高学年対象） 「すてられるまえに食べものをすくおう」	コンポスト活動中参加者、子ども食堂、パントリー等、学校、活動関係者などにモニタリング 好評。

2. 事業内容（取り組みの流れ）

家庭における食品ロス削減活動の持続的な拡大には、知る 体験・行動する 体験に基づいた理解と活動の主体としての成長 仲間を広く募りながら、活動を継続拡大していく 4つの段階が考えられる。この取り組みでは、主に と をなるべく「多様な実体験」のある場所で実践し、知見を得ること、可能であれば の段階を目指す。

取り組みの流れ	内容	具体的な目的と効果
<p>(1) 認知</p> <p>↓</p>	<p>食品ロスを知らせる</p>	<p>未然に知る 機会の提供</p> <p>とりのこさない 少しでも早めに伝える</p>
<p>(2) 体験・行動</p> <p>↓</p>	<p>実体験 参加</p>	<p>参加体験機会の提案 たのしく、簡単で、誰にも開かれている 1グラムでも減らせた！ことをみんなでよろこぶ どこでも再現可能なシンプルでコンパクトな活動の具体提案</p>
<p>(3) 理解 認知向上</p> <p>↓</p>	<p>自分なりの理解と感心を育む</p>	<p>個々の生活、所属などに応じた、日々のとりくみについて自ら考えられるようになる。個人の気づきをチームに還元しボトムアップできるようになる。</p>
<p>(4) 継続 拡大</p>	<p>なかまとともに継続</p>	<p>個からチームへ 担い手を固定せずに、動的平衡を保ちながら試行錯誤し、広く繋がりを生み出しながら変化し続ける</p>
<p>情報のアーカイブと発信</p>	<p>であいとつながりの創出</p>	<p>持続的な活動を記録、発信し、積み上げていくことで、常に仲間を募り、活動のあり方を試行錯誤していく。</p>
		<p>社会の仕組みや、制度や価値を変化させていくことを目指す。</p>

3 . 事業の実施体制 対象と体制

テーマ	内容	具体内容 対象	実施体制
参加促進 認知向上	取り組みのお知らせ	北九州市広報物での広報（子ども若者成育課）活動の受付と問い合わせ対応 HP特設サイト開設・デザインツール設計	あそけん*1：北九州市子ども家庭局発行 体験活動情報誌『キッズチャレンジ』（市内全小学生配布） KPC*2：ちらし・広報ツールデザイン設計
発生実態の 調査	食品ロス発生経路のヒアリング調査	子ども食堂活動者・参加者のみなさん 市内各所 高校、大学などの活動参加者	あそけん：ヒアリング設計・実施
	食品ロス世代別意識アンケート調査	紙面アンケート、webアンケート設置 子ども食堂活動者・参加者のみなさん 市内各所高校、大学などの活動参加者	KPC：WEBアンケート設計 設置記事掲載 あそけん：対面の聞き取り調査、対面アンケート実施 ペルソナの整理分析
個別取組の 実証	子ども食堂食べきりチャレンジ	子ども食堂・フードパントリー活動会場で 食べ切り啓発と食べる量を計測	あそけん：活動計画・周知・実施 記録集約等
	サルベージクッキング	子ども食堂活動者によるサルベージクッキング活動 地域の親子、高校生、大学生によるユース活動	KPC： 企画・監修記録 あそけん：実施補助、ヒアリング あそけん： ユースや子育て家庭が集い活動 計画実施 記録
	過剰除去防止クッキング体験	普段調理しない人による廃棄削減調理体験を記録	KPC：活動計画・周知・実施、記録集約等 あそけん：監修 ヒアリング等
	フードライブ・フードパントリー啓発活動・意識調査	子ども食堂・大型イベント会場などでの フードパントリー会場での対面啓発とヒアリング。一般家庭、高齢者、大学生対象	あそけん：活動計画・周知・実施 記録集約等
	コンポスト活動	実践による検証 小学校 高校 放課後等 デイサービス 一般ユーザ キット提供 子ども用、大人用パンフレット制作	あそけん：キット制作、導入研修、活動支援、実施状況調査 KPC:デザインツール制作 パンフレット パネル等
	SNS・HP広報	HP特設サイト開設 デザインツールの設計・デザイン メルマガ・SNS も合わせて活用	KPC:サイト設計（アンケートサイト含む）制作 KPC:ブログ・メルマガでの告知 システム設計 あそけん：一部運用
	「すてられるまえに食べものをすくおう」の制作	デザイン制作。効果測定 コンポスト活動参加者、子ども食堂、パントリー等、学校、活動関係者等にモニタリング	KPC：デザイン・制作 KPC あそけん：監修 制作物効果測定

*1 あそけん 特定非営利活動法人あそびとまなび研究所

*2 KPC 有限会社ケイピーシー デザインワークを委託

4 . 事業の成果

食品ロス発生経路のヒアリング調査

実施概要

- ・実施期間 2025年7月-12月
- ・実施場所・箇所数 子ども食堂活動会場（子ども食堂14 大学2 高校4 放課後等デイサービス1 他）
- ・調査実施日数 41日間

調査結果の概要

まとめ 1) 11のペルソナが発見されました
「食べ物は捨てていない」人も、
どこか別のところで発生させていることが予想されました。
(買う人と食べる人が違う。ゴミを生む人と、捨てる人が違う)

各活動を通して、買う人、食べる人、などフェーズのつながりが分断
されていることで、食品ロスが無意識に行われていることがわかった。
つながりの解消が、初めの一步となることが期待できる。

Aまとめ 2) 既存の市や国の施策についてほとんど知られていないことがわかりました。

Q 10月は食ロス月間、ということを知っていますか？

Q 食べきり運動の「30・10(さんまる・いちまる)運動」を知っていますか？

どんなことをしたらいいかわからない、から、していない。ひとりでは、新しいことは、わからないし、始めにくいということがわかりました。

食品ロス世代別意識アンケート調査

実施概要

- ・実施期間 2025/07月-12月
- ・実施場所 子ども食堂やフードパントリー、コンポスト啓発などの活動会場にて（特にユース層に）
活動会場で随時 全て対面での案内を行い実施
総数 活動日数 延109日 調査協力者総数 4724人（子ども・学生2524人 大人2200人）
会場総来場者数 30548人
食品ロスについてのアンケート 2187組
- ・集計 会場、カテゴリごとに報告

の調査を踏まえて、質問紙を作成。「食品ロスを知らない」比率が高いことや、何をしたらいいかわからないから何も行動していない、ということが想定され、質問を見る、回答することで、「何をすればいいかわかる」質問紙を作成。

<分析・結論>

* 参加すること自体が、食品ロスを目にし、手に取り、アンケートに参加することで、対応策についても、理解をすることにつながりました。

* 活動を重ねると、理解が進み、前向きな姿勢がみられました。アンケート調査に参加した人々が、新たに「なにをすればいいかが伝わった」到達数。

* 「なにをすればいいかわかった」という感想多数。

食品ロス発生経路のヒアリング調査 調査の方法と結果概要(1/2)

目的	家庭における食品ロスは、実際には、非常に個別的な状況や、諸事情から生じていることが予測され、既存の大規模のwebアンケート調査では捉えきれしていない。具体的にどのような状況から生じるのかを、知るために、様々な世代、生活環境の方々に対面でヒアリング調査をお願いした。これらに基づき、 の質問紙 *2を作成した。
実施日時	2025年7月-12月 (調査実施日数 41日間)
実施方法	子ども食堂活動会場(子ども食堂14 大学2 高校4 放課後等デイサービス1 他)で、ヒアリング協力の日常の活動状況を踏まえつつ実施。一方的なヒアリングではなく、集団、もしくは個別に協力をお願いして対話をお願いした。
質問内容	質問紙*1により、具体的に、食品ロス発生シーンとその理由や対応について対話。
対象	乳幼児のいる親～90歳代 子ども食堂やフードパントリーの活動者や参加者、関係者

ヒアリングの結果のまとめ

食品ロス発生背景

- 食品がある程度足りている状況と、生活の孤立が重なることで食品ロスが生じることがある。

知識から行動への多様な道筋

- 人々が食品ロスを「知る」ことから「体験・行動」へ至る道筋は多様であり、それぞれに合った参加機会を提供し、実際の人とのつながりの中で自ら考え行動できるよう導くことが重要である。

子どもの認識と大人の役割

- 子どもたちは家庭での経験や家事の役割によって認識が大きく異なり、日常的に接しない事柄については理解や想像が難しい。これは大人が教えていないこと、経験不足が原因であり、子どもたちの気づきや興味に大人が関心を持つことが求められる。

「食品を捨てていない」背景の多様性

- 「食品を全く捨てていない」と答える人の背景には、家事をしないためロスに気づかない場合や、外食中心の生活、食品不足で食べ尽くしてしまう場合など、さまざまな事情がある。

*1 質問紙 <https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSdssf-8CLo3W3iQMRRglMeH8SxySc50baJgCmnnAuAaa0b0Jg/viewform>

*2 子ども用 ユース用など <https://www.asobitomanabi.org/frm/data/>

食品ロス発生経路のヒアリング調査 調査の方法と結果概要 (2/2)

対象者と傾向

「学生」「高齢者」といった一括りにできるものではなく、生活状況やこれまでの環境など様々な要因で、「食品ロス」に関連する行動が表出する。

同じ家庭内であっても、役割や、立場が違えば全く異なる認識をしている場合がある。



家庭での食品ロスはどのような状況で発生？

Q まだ食べられる食べ物を捨ててしまったことがありますか？
いつどんなものを、捨てましたか？（自分以外が捨てた物含む）

使い忘れ 買いすぎ

- ・冷蔵庫の中で賞味期限が過ぎて悪くなってしまったもの。
- ・やさい。ふるくなってしまった。
- ・作りすぎてしまったカレーをくさらせてしまいました。
- ・給食のこしてしまった。パンや牛乳。お弁当のたべきれなかった分をすててしまった。
- ・カップラーメンの汁。
- ・冷蔵庫への入れ忘れ。
- ・夏に溶けたあめやチョコレートを捨てた
- ・子供がこぼしたもの。
- ・体調不良で食べられなかった。

作りすぎ

食べ残し

保管方法

事故・汚破損

具体的な対策 の提案

Q 食べきれないものを、捨てないように工夫したり、みんなで協力したことはありますか？

買い物工夫

- ・野菜を買いすぎない
- ・野菜を買ったら、冷蔵庫に何日に何を買ったか貼っている

たべきり

- ・食べきれ分だけ作って食べる
- ・次の日にアレンジして食べる

適切な保管

- ・冷凍する
- ・実家にシェア

分け合う

- ・みんなで食べる
- ・みんなでわけるペットにもあげる
- ・フードドライブ、サルベージパーティ

生ゴミ減容

- ・コンポストの勉強会体験会をしました

質問内容：

- ・それぞれの活動会場における取り組みのあり方、関係者の考え方や活動状況と、個々の生活における考え方や活動状況について、現場や生活の中の具体的な事柄について尋ねている。
- ・小集団、と個別でのヒアリングを段階的に行った。
- ・子ども食堂活動や地域活動実践の様子（地域全体や個別）や、対象者それぞれのコミュニティや家庭における食品ロス削減についての取り組み状況などについて尋ね、それぞれの生活の様子からのペルソナの整理を行った。
- ・まとめは、個人としての生活環境に注目して行った。

食品ロス発生経路のヒアリング調査 ペルソナ（1/3）

ペルソナリスト1

分類	小分類	食品ロス発生の背景 環境	生ゴミ出現頻度本人関与	環境負荷	提案1	提案2
高齢者ひとり暮らし	A	一人分を作るのは無駄が多いので、コンビニやスーパーの惣菜を利用する。生ゴミはほとんどでない。一人で食べるのはちょっと味気ない。子どもの頃は、食べるのに困ったので、子ども食堂にも関心がある。	低	高	近所の子ども食堂に、参加してみてください。地元の旬の野菜や手作りの料理に出会えます。	地産地消 果物などは地元のものを選ぶ
	B	料理が好きで、一人分でも手間をかけてつくる。ので、どうしても生ゴミが出ます。昔は、生ゴミは、庭の鶏にたべてもらっていたんだけど。毎朝卵も産んでくれたし。	中	低	子ども食堂や、会食機会への参加やコンポストを提案。	地産地消、過剰除去防止
高齢者二人暮らし	A調理担当者	持ち家に二人暮らし。野菜の皮なども、余さず調理する。小さいが庭があり、コンポストをして、野菜を育てている。生ゴミを廃棄はゼロ。最近夫が認知症気味で、家を空けられないのが悩み。月に1-2度子ども食堂の手伝いに行く。	皆無	低	出かける機会でもある、子ども食堂活動には、たくさんのボランティア仲間がいて、世代もさまざまとても楽しい。	子ども食堂の若い人たちと、隣の現場へお手伝いに
	B調理担当者	団地暮らしなので、多くはない生ゴミは捨てていたけれど、部屋の中でもできると聞いて、竹100%のコンポストに挑戦してみた。野菜の皮のお料理を聞いて、試してみました。ちょっと気かけると、ゴミって減る！を実感。	低	低	コンポストでさらに生ゴミ廃棄ゼロに！子ども食堂に参加したいと思っているので、いくつか近所をご紹介します。	子ども食堂、地産地消、過剰除去防止
	C	お米は実家から来る。持ち家に二人暮らし。年金暮らしで買い物に行くと同じものを間違えて買ってしまうので、フードドライブに寄付している。	中	中	フードドライブ、フードバンクに寄付。どこへ寄付したらいいかわからなかったから、子ども食堂に電話した。	地産地消、過剰除去防止
	D	高齢の親と同居する高齢者 調理は普通にするので、生ゴミは、でているが、極力減らすようにしている。母が買い物好きで、余分に購入してきてしまうので困る。頂き物などは、ご近所とのお裾分けで解決。	中	低	どうしても、食べきれないものは、フードバンクに寄付。仕事を引退して時間ができたら、コンポストもおすすめです。	地産地消、過剰除去防止 おすそわけ
高齢者二人暮らし	E家事をしない	家事の大半は家族任せなので、生ゴミをどれぐらい捨てているかは知らない。少なくとも食べ残しはしないが、お皿に乗らなかった食品のことはわからない。	?	?	自分は捨てていないので、たずねられると「捨てたことはない」と答える。まずは自宅の実態を知るところから	ゴミだし、お買い物から始めよう。地産地消も。

- ・「小分類」：A～Eは便宜的に分けたもの。
- ・「生ゴミ出現頻度本人関与」：本人の活動により、家庭から生ゴミが出現する頻度を「高・中・低・皆無・？」に相対的にわけている
- ・「提案1」：対話の中で、質問などのやりとりから、ご本人がすぐ実施できそうな実際に提案したことから。
- ・「提案2」：さらに可能なら、実践してみると良いおすすめな活動。個人では難しいので、実戦には支援が必要。

食品ロス発生経路のヒアリング調査 ペルソナ（2/3）

- 同じ家庭の中でも、買い物や調理、ゴミ捨てなどの家事に参加しているかどうかによって、理解や関心が大きく異なる。
- 自分の生活の中から生じている食品ロスについて知らないと、課題を把握することもできないし、自ら行動することもできない。家事役割をある程度になっていたとしても、家事の知識や経験値や、本人の価値観や考え方、所属するコミュニティなどによっても異なる。
- 世代別、ペルソナ別に細かく分けていくと、相応の対応策は提案できるが、大きく年代や、家族形態、就業修学形態、などでは括れないことがわかった。世代に括って、一方的に提案を行っても実行に至らない。

ペルソナリスト2

分類	小分類	食品ロス発生の背景 環境	生ゴミ出現頻度本人関与	環境負荷	提案1	提案2
青年一人暮らし	A家事男子	弁当を作って職場へ持って行く。休みの日に野菜をまとめて買いするため、同じ野菜を食べ続けなければいけないのが悩み。	低	低	子ども食堂や会食会場へ参加がおすすめ。一人分より分け合うと美味しいし無駄もないです。	地産地消、過剰除去防止
	B家事しない独身	ほとんど自炊はしない。買い物はまとめて買いか、宅配。米も炊かないので、自宅でもレンチンのレトルトご飯を常備。仕事は激務でほとんど外食。	低	高	たまには、自炊を。米を炊いておにぎりを作ることから。子供食堂へも参加してみよう。	地産地消、冷凍保存 果物などは、地元のものを選ぶ
学生一人暮らし	理系寮生	学校の食堂が充実しているので、主に利用。寮では、集まって食事をすることも。忙しく、毎日料理できないので野菜が使いきれない。備え付けの冷蔵庫がとても小さい。料理やコンポストには実は興味津々	中	中	みんなでごはんの回数を増やす。子供食堂に参加する。サルベージパーティがおすすめ。ほっとらかし可能な竹100%コンポストをおすすめ。	地産地消、過剰除去防止
	文系学生 少し自炊	少し自炊をする。経済的な理由もあり。バイトや授業の予定が不規則なため、食べそびれてしまう。高校の調理実習で学び、自炊に苦労はなく、コンポストもやってみた。	中	中	大きめの冷蔵庫で冷凍保しておこう。みんなでつくって食べる機会を作ろう。コンポストは時々再開してね。	地産地消、過剰除去防止
	理系学生 自炊なし	超多忙 ほとんど自炊はしない。食事はバイトの賄いか誰かが作ってくれるか、外食。なので、生ゴミはない。食べ切りには自信がある。食べ物が余っているなら呼んで欲しい。	低	高	少しは自炊を。米を炊くことから。子供食堂へも参加してみよう。食べきれないものがあるかも。	地産地消
親と同居青年	A在宅ワークで親と同居	家事の大半は親任せなので、生ゴミをどれぐらい捨てているかは知らない。少なくとも食べ残しはしないが、お皿に乗らなかった食べもののことはわからない。	?	?	自分は捨てていないので、たずねられると「捨てたことはない」と答える。まずは自宅の実態を知るところから	ゴミだし、お買い物から始めよう。地産地消も。
子ども	A小学生以下	家事の大半は親任せなので、生ゴミをどれぐらい捨てているかは知らない。残さず食べる、ことは、がんばっているけど、残ったら、多分親が食べている。捨てているかも？お皿に乗らなかった食品のことはわからない。おうちの人が用意してくれたおやつが、食べきれないときや、それじゃないっていうときは、家族のだれかにあげる。	?	?	自分は捨てていないので、たずねられると「捨てたことはない」と答える。自分で選ぶこともない。買い物やお料理のお手伝いをして、まずは自分で選ぶところから。子ども食堂もおすすめ。	家事参加 子ども食堂
	B中学生以上	家事の大半は親任せなので、生ゴミをどれぐらい捨てているかは知らない。弁当に苦手なものがあると、残してしまう。朝夕、弁当の時も。食事時間が家族バラバラなので、みんなが何をどれぐらい食べているかも知らない。朝は食べないことが多い。たまに自分でお昼ご飯やおやつをコンビニで買うときもある。	?	?	自分は捨てていないので、たずねられると「捨てたことはない」と答える。家事の分担をして、現場を把握しよう。買い物する時は、食べ切れる分をかおう。	少し自炊ができるようになろう。子ども食堂にボランティアにいこう。手前どり、近所で買物がおすすめ

食品ロス発生経路のヒアリング調査 ペルソナ (3/3)

ペルソナリスト3

分類	小分類	食品ロス発生の背景 環境	生ゴミ出現頻度 本人関与	環境負荷	提案1	提案2
ひとり親家庭	A小さい子どもありの親	子どもたちの食べる量が定まらないので、無駄が多い。親が食べ切るようにはしているけれど、食べ残しが出てしまう。経済的にも時間的にも余裕がない。	中	中	手のかからないコンポストならやってみてみたい！ゴミを減らして、ゴミ袋代を浮かせたい。竹100%コンポスト、や子ども食堂もおすすめ。	子ども食堂、フードパントリー、コンポスト、過剰除去防止。手前どり
	B大きい子どもありの親	食べるものがそもそも足りない。子どもたちもバイトや学校で予定が読めなくて忙しい。食料は不足気味なので、捨てるものはない。経済的にも時間的にも余裕がない。まとめ買いするので、同じものが続いてしまう。	低	低	子ども食堂やフードパントリー活動に参加しよう。中高生なら、ボランティアとして活躍できる。料理や食材について学べるし仲間もできる。	フードパントリー、子ども食堂。サルベージクッキング。手前どり
子育て家庭	A調理担当者 子どもは小学生	祖父母の代から庭でコンポストをやっており、家庭でもやっている。料理は得意で、毎日食事を作るので、それなりの量の生ゴミが出る。食べ残しはほとんどない。子どもと竹100%コンポストを台所で初めてみた。	皆無	低	釣り好きの家族が釣った魚を捌くと大量のアラ、がでるが全てコンポストへ。堆肥で野菜を育てている。竹100%コンポストは、放置してもよく、扱いやすいのでおすすめ。	食べきれない時はお裾分けを。台所で手軽にできる竹100%コンポストは初心者向き。
	C調理担当者 子どもは小学生	料理は苦手。家族四人の食事を用意するのに、食材を無駄にしてしまうことが多い。レシピ通りに食材や調味料を揃えると、使いきれずに無駄になってしまう。お土産などの頂き物が食べきれないことが多い。	中	中	食べ切りサルベージクッキング仲間を見つけよう。簡単で、無駄のないお料理のコツを教えてもらうチャンス。	食べきれない時はお裾分けを。フードドライブ

食品ロス世代別意識アンケート調査

取り組みの概要と方法

目的	フードパントリー活動は、様々な事情で、フードバンクなどにもたらされた市場に出ない農作物や廃棄されてしまう食品を参加者に引き取っていただく活動。北九州市内では、子ども食堂活動の際に同時に実施されていることが多い。食品ロス削減に貢献できる取り組み会場で、食品ロスの認知率や日常の取り組み状況について尋ねた。
実施期間	2025年7月-12月 41日間
実施方法	実際に提供される食品について廃棄に至る事情や、ここに運ばれてきた経緯を伝えることで、食品ロスが生まれる理由や課題について知らせ、引き取りに参加すること自体が、食品ロスを減らすことに貢献する、という意味もあることを説明する。同時に、参加者に、食品ロスに関するアンケートに協力をお願いする。
質問内容	結果を参照 言葉の認知、活動の意思など
対象	フードパントリー活動・子ども食堂活動来場者（子ども食堂14 大学2 高校4 放課後等デイサービス1 他）

◀アンケート回収数

総参加者数 アンケート回収数	子ども	大人	合計	少*2	多*3
会場来場者 展示見学者	5184	5145	25824	13	
対面活動					
たべきりちゃれんじ（会食+パントリー）計測	215	107	322	170	2
啓発+フードパントリー（回答は家庭毎）	1465	1705	3170	897	132
たべきりちゃれんじ パントリー計測	827	343	1170	959	
そのほか *1	17	45	62	12	2
	2524	2200	4724	2051	136
WEBアンケート	22	69			
WEB アクセス	2100				
チラシ配布	子ども食堂、小中学校、保育園、市民センターなど				

*2 簡易質問紙回収数

*3 詳細質問紙回収数



***1 過剰除去防止たべきりちゃれんじ**
サルベージクッキングと竹コンポスト交流会
過剰除去防止クッキングコンテスト
サルベージクッキング

2025/7/15 - 2026/1/17
大型会場イベントでの啓発展示 7日間
ヒアリング（活動会場にて）対面 41日間
パントリー&アンケート（対面）61日間

(参考) フードパントリー活動の実施について

フードパントリー活動は、消費者庁のガイドラインに則って開催され、細かにルールが設定されており、その周知を行いながら活動を進める。

フードパントリー参加にあたっての「誓約」

すべての食品を自己の責任で自家消費すること
すべての食品を決して第三者に譲渡・転売等しません。

食品はが寄贈を受けたものであることを理解し、その品質や味覚等に関して貴団体に対して一切の請求を行いません。

目の前にあるものしかありませんので、返品や交換には応じられません。受け渡しのルールのあるものもありますので、守ってください。

商品の残渣または商品自体を破棄する場合、自治体の指示に従って適切に廃棄処分致します。少しでもゴミを減らす、という活動でもあります。パッケージや、中身を捨てる時は、ルールに従ってごみの分別や片付けをします。

すべての品物と活動について、撮影とインターネットやSNSへの投稿は禁止です。

受け取った食品の問い合わせ先は、くきのうみこどもフードバンク(特定非営利活動法人あそびとまなび研究所)であることを理解しています。メーカー等への問い合わせは厳禁です。

フードパントリーの手順

フードパントリーの趣旨説明
「食品ロス削減に貢献し、資源を有効活用する取り組みである」「わけあい、を基本とし、必要とする人なら誰でも参加できること」趣旨を理解・賛同

参加の意思を尋ねて、受付名簿への記入
誓約書記入が参加条件であることを説明し、同時にアンケートへの協力を依頼する。

(同じシート内の)フードパントリー参加の際の「誓約」事項を読んでもらう。

「誓約」事項について、読み合わせをしながら、チェックリストに記入してもらう。

(緊急連絡先、氏名等も記入が必要)

記入が全て完了していることを確認し
食品の説明を聞いて、自分でよく確認して引き取る食品を決める。

引き取る食品を、引き取り表に記入する。

(たべきりちゃれんじでは 引き取る食品計測)



九州国際大学での取り組みの様子

食品ロス世代別意識アンケート調査 (1)-1

実施日時	2025/12/20
実施場所	みやこまち 駐車場（福祉施設内交流会館）130人参加）
実施方法	子ども食堂活動会場で、対面で食べ切り啓発を行いながら、「食べる量を測る」活動と、フードパントリーで食品を引き取る際に、対面で活動の紹介と、アンケート協力を依頼。
対象	イベント参加者 集計数 50組



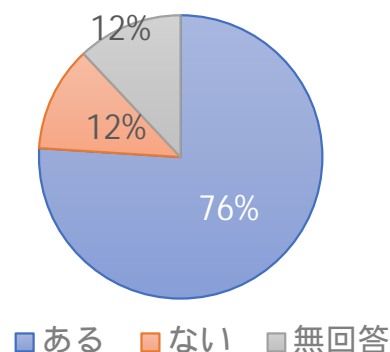
- 活動会場は、今回子ども食堂活動を始めて実施しており、町内でも珍しい取り組みであったにもかかわらず、多くの参加があった。
- クリスマス時期で、さまざまな寄贈品もふくめ、賑やかなフードパントリー活動となった。

<分析・結論>

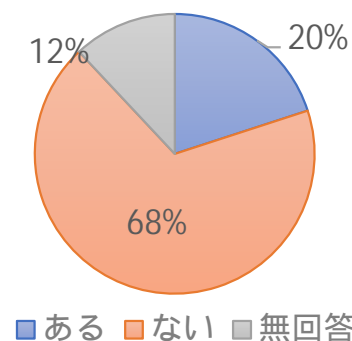
- 初めて子ども食堂に参加した、フードパントリーに参加した（88.8%）、という方々の驚きが大きかった。
- 活動を前向きに受け止めて今後の意欲につながる事が伺えた。
- 「わけあう」ことができると、結果的にロスは減るのだが、分け合うためのつながり自体を喪失していることが活動から観察された。

集計結果

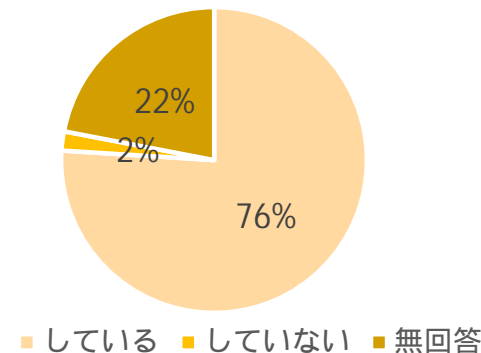
Q1 「食ロス」「フードロス」という言葉を、聞いたことがありますか？



Q2 フードドライブボックスをみたことがありますか？食べきれない食品を入れる箱です。



Q3 食品ロスを減らすために、やったことがある、していることは？（複数回答のうち何らかの回答をしているもの）

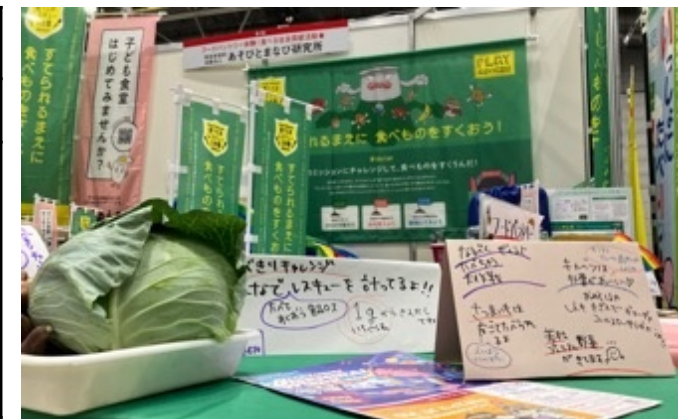


<参加者の感想>

- ・（量ってみたら）思ったよりも重い。
- ・秤が面白い。
- ・一人で食べるよりたくさん食べた。
- ・また参加したい。
- ・みんなに教えたい。

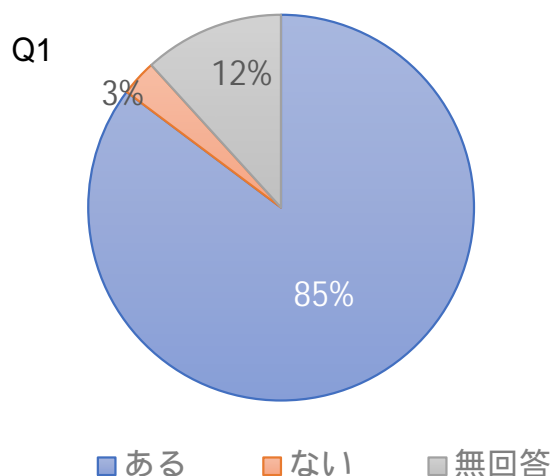
食品ロス世代別意識アンケート調査 (1)-2

実施日時	2025/12/12
実施場所	北九州メッセ ゆめみらいわーく会場 (12/11-13 13,845人来場)
実施方法	3日間で会場でフードパントリー参加体験ブースを展示。会場にタペストリーや幟を掲げ、参加を呼びかけた。市内の中高生が多数来場。全て対面で取り組みについての説明を行い、参加者にアンケート協力を依頼。いずれも引き取り食品の重量計計測を行なった。 「3日間で、みんなが全部でなんグラム引き取って食べてくれて、食品ロスが減ったかを、ぜんぶ集計する」と伝達。
対象	集計数298名 (3日間総参加者数 905名 のうち一部を集計)

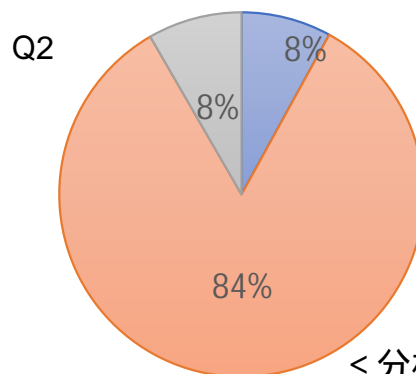


集計結果

Q1 「食ロス」「フードロス」という言葉を聞いたことがありますか？



Q2 フードドライブボックスをみたことがありますか？
食べきれない食品を入れる箱です。



Q3食品ロスを減らすために、やったことがある、していることは？
(複数回答のうち何らかの回答をしているもの)

- ・初めてフードパントリーに参加した (76.9%)
- ・食べ物を残さないようにする (72.7%)
- ・食べる分だけ買う46.0%)
- ・冷凍保存 (31.3%)
- ・みんなで食べる (25.7%)
- ・だれかにあげる (22.3%)

<分析・結論>

大半の来場者が中高生。初めてフードパントリーに参加した (76.9%)

・当日会場でフードドライブボックスを初めてみた人が多数。
・わけあう、ことができると、結果的にロスは減ることも理解できているが、分け合うためのつながり自体の減少は子ども達の間でも生じている。

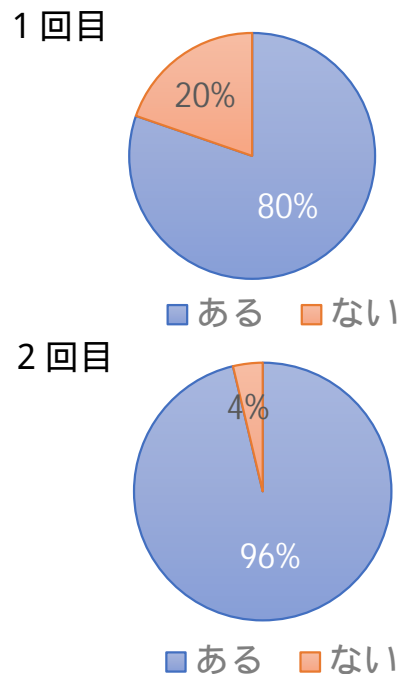
食品ロス世代別意識アンケート調査 (2)

実施日時	2025/12/3	2025/12/26
実施場所	福岡県立若松高等学校	
実施方法	高校内の同じ会場で10月から毎月繰り返しフードパントリー活動を実施。全て対面で取り組みについての説明を行い、毎回アンケート協力を依頼。2回目は、引き取り食品の重量計測を行なった。	
対象	生徒のみ 71人（初参加率55.2%） 生徒26人・子育て家庭28件（初参加率40.0%）	

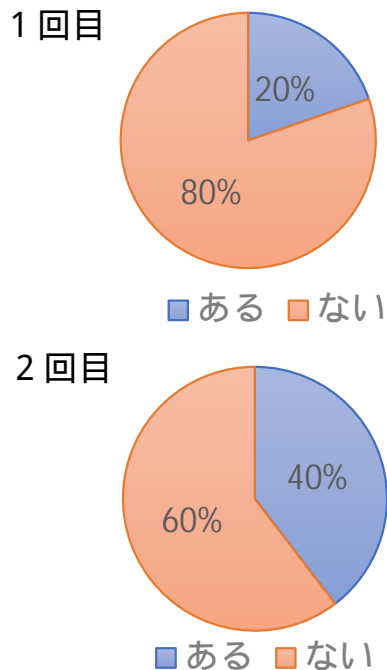
集計結果

段階的に、近隣小中学校などへの案内を実施しており、新しい参加者が多い割に理解が深まっていることがわかる。

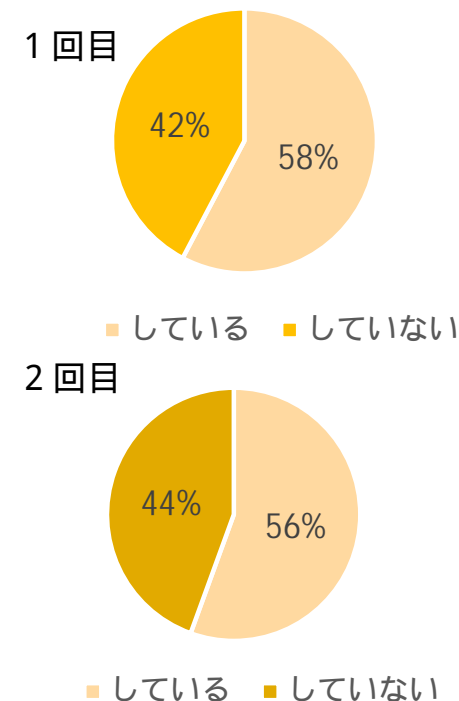
Q1 「食ロス」「フードロス」という言葉を、聞いたことがありますか？



Q2 フードドライブボックスをみたことがありますか？食べきれない食品を入れる箱です。



Q3 食品ロスを減らすために、やったことがある、していることは？何か一つでも実行している人。



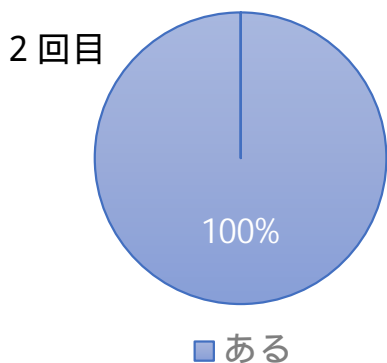
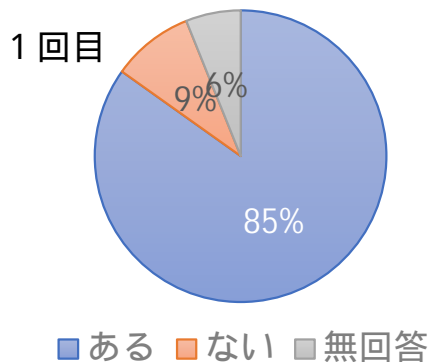
配布する食品は主に政府備蓄米などで、くきのうみこどもフードバンクが調達、近隣子ども食堂が主催、若松高校インターアクト部が準備運営の支援を行っており、配布当日も多くの子生がボランティアスタッフとして活躍している。配布対象が子ども中心のため、子育て家庭が親子で来場し、高校生と交流しながら参加している。生徒たちと学び合いながら、展示啓発資料等の工夫を重ねている。

食品ロス世代別意識アンケート調査 (3)

実施日時	2025/11/30	2025/12/22
実施場所	九州国際大学	
実施方法	<p>大学祭の模擬店として、一般向けにフードパントリー活動を実施。全て対面で取り組みについての説明を行い、参加者にアンケート協力を依頼。同時に親子向けに食クロスクイズラリーを実施。</p> <p>の活動を行った学生が授業で他の学生たちとの活動発表交流で「日本の食品ロスについての課題のまとめと調査、学内での活動報告」を発表した後、実際の参加機会として学内での活動を案内して実施したものの。</p>	
対象	<p>大学祭での啓発展示と食ロスクイズ・フードパントリー 66人 (初参加率83.1%)</p> <p>学内学生 28人 (初参加率 88.9%)</p>	

集計結果

Q1 「食ロス」「フードロス」という言葉を、聞いたことがありますか？



フードパントリー参加の際の説明と食品ロスについての取り組み紹介、アンケートへの協力を依頼。引き取る食品を選んでもらい、秤でその重さを計量



クイズラリーのクイズを考える中で、さまざまな学びがあり、当日は、たくさんの親子が参加。子どもたちとのやりとりを通じて、学生と子どもたち、保護者の間でさらに食品ロスについての理解が深まった。



この取り組みに先駆けて、学生たちは、事前研修活動として、近隣の複数の子ども食堂やフードパントリーの現場に出向き、ボランティアとして高校生や地域の親子とともに活動を重ねている。

その中で、現場の活動を通じて食品ロスについて学び、自分たちが大学内での活動にどう取り組むかを考えて行った。学内での活動のための手続きや、リハーサル、企画の準備や資材の運搬など、活動を実現するための手順は、多岐にわたるが、一部でも関わり、参加することからはじめ、ゆっくりと理解が広がって行った。

なにより地域の子供達との活動は非常に好評でした。



他の学生たちにも知らせたい、と発表後に学内でミニフードパントリーを実施。

子ども食堂食べきりチャレンジ

目的	「捨てられたもの」を量るのではなく、「食べきれた量」を量る。食べ残しが出ないようにする工夫を、みんなで考えて現場で実践する。			
実施日時	-1 2025/11/12	-2 2025/12/8	-1 2025/11/25	-2 2025/12/16
開催場所	子ども食堂なむなむやむやむ極楽寺 多文化多世代食育交流会あーぶくたった 北九州市立大学留学生会館集会室			
実施方法	子ども食堂で食べるものとフードパントリーで持ち帰るものの記録、計測を行なった。 一人一人、子ども食堂で食事の総重量を計測し、自分の適正な量について考える。 食べ切るためには、どうしたらいい?など、と問いかけながら、それぞれの工夫、廃棄削減の様子を捉え、啓発と具体的な改善案を作成する。			
対象	-1 60人	-2 44人	-1 36人	-2 58人
				-2 アンケート回収 41組

成果

実際に活動現場では、自分で食べられるだけの量を盛り付けてもらうことから始めるので、食べ残しはほとんど出ません。ごく一部、発生する「たべきれない」「これじゃなくてあっちが食べたい」という状況には、家族で食べ切ることを工夫していました。(食べきれないのは、ママに食べてもらう)など。



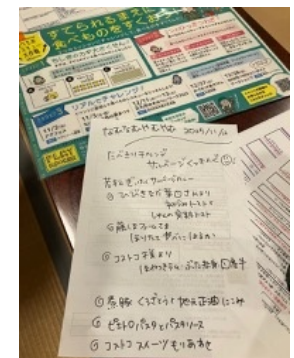
自分の食べるものを選んで持ち帰ります。持ち帰るものは全て記録し、計量します。「重さ」が理解しやすいように。アナログ秤を使用します。



自分の食べるものと量を選んで、とりわけてもらい、秤でその重さを計ります。おかわりをした時もその都度量って記録します。



フードパントリーで引き取る食品は品目の記録を行い、計量します。



この日の献立もサルベージ献立！地域の美味しいものが満載です。

子ども食堂主催者のみなさんへのヒアリングでは、活動団体ごとに様々な考え方と、対策があることがわかりました。活動の目的によって、食べ残しに対する考え方も変わります。盛り付けの見本を見せて、小さな子供にも量が伝わりやすくする、おかわりができるようにしておくなど、食べ残しを防ぐ工夫をされています。好きじゃないもの、食べたことのないものもめいめいのお膳にまず並べる、魚だとたくさん残すけれども、という考え方のところもありました。子どもたちとの対話のなかから、よりより形を探し、積み重ねていけることが、毎月繰り返される活動の強み。(子ども食堂は、学校などと異なり、分け合いや廃棄のルールが厳格ではないので、さまざまな工夫が生まれる。

<参加者の感想> (有効回答27組中)

- 思ったより重い51.6%
- また参加したい 59.3%
- 秤が面白い22.2%
- 一人で食べるよりたくさん食べた14.8%

サルベージクッキング

目的	家庭であまりかけ、あまった（もうだめ？な）食品を持ち寄ってもらう。 集まったみんなで調理方法などを検討し調理し、実際に食べてみる。
実施日時	2025/11/22 2025/12/28
実施場所	タカミヤ環境ミュージアム
対象	9名 子ども食堂活動者を中心に ユースを中心に 中高生含む子ども14名 大人13人



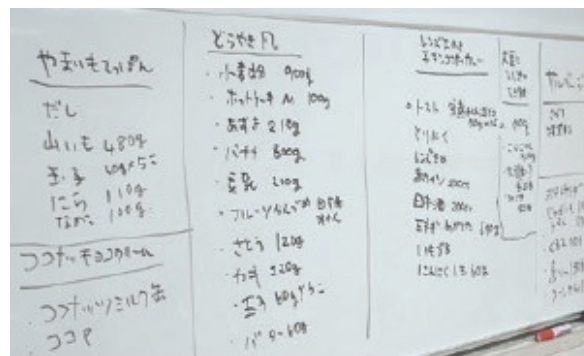
「すてられるまえに、食べものを救おう」！美味しいご当地野菜がたくさんもたらされ、工夫して調理してお腹いっぱいになりました。異年齢で好みもバラバラだけど、一緒に食べるとすごく仲良しに！

成果

- 廃棄を減らすための取り組みのため、同時に過剰除去対策も自然に実施される効果がある。
- 合わせて、保存についての知識、安全に関する知識の差異、感覚の違いを確認することができた。（購入した理由、余った理由の共有。お互いに可能な範囲で）。
- 購入方法や、食べ方の工夫、調理方法の検討。
- 活動中には、寄せられた食品にまつわる保存方法や、多様な使い方の工夫なや余らせない対策などの知恵も共有された。



参加者が野菜や果物、缶詰、乾物など、約16kgもの多様な食材を持ち寄りました「お土産でいただいたんだけど、使い方がわからない」「つい買いすぎてしまった」「農家さんに旬の時に分けていただいて冷凍していた」等、さまざまな理由で家の奥に眠っていた食材たち。



黒板に書き出し、互いの知恵とアイデアを出し合っ、その場で次々と即興メニューを決めていきました。総重量16Kgの食品を調理。残った生ゴミは、わずか2Kg。
山芋は、ガスコンロでヒゲを焼いて、皮ごとミキサーにかけて調理しました。にらの根元も、ほとんど落とさず、使い切ります。



見栄を張って、購入して持ち寄るのではなく、あくまで、たべきれない、を助け合う、ということが趣旨。お互いに労いながら、あるあるー、と共感しながら、和やかに活動が進んだ。
非常に現場は面白く、互いに学びが多かった。参加者からは、「毎月やりたい！」と大変好評

<横展開のポイント>非常に現実的で、特別な準備をしなくても無理をせずに学びが共有できる活動。実際に食品ロスを減らせている（数値で出せる）のも、参加者にとってはとても励みになる。互いに新たな食材に出会う機会でもあり、食材の保管用や調理法、など知識の共有の機会となり、将来的にも活かせる、恒久的な食品ロスにつながる、楽しくて意義深い活動。前提知識も必要なく、自然に交流と学びが生まれる。

過剰除去防止クッキング体験 (丸ごと食べ切りチャレンジ)

目的	「丸ごとたべきる」ことを目標に、普段あまり調理をしない人による調理体験を行う。 過剰除去の現状把握と改善策の実践を行う。
実施日時	2025/11/14
実施方法	あらかじめ準備された食材で、指定されたメニューを軸に工夫して調理を行う。特に指導は行わない。 残菜を計測し、過剰除去の現状を把握する。経験値の異なる3チームでの対戦。一緒に料理するのは初めての6人。
実施場所	小倉北区 クッキングスタジオ
対象	6名(2名ずつ3チーム) 食べるサポーター8名

A 普段料理しない父+息子
カレー、野菜サラダ (7.9%)

B 料理男子+食べる専門高校生
ホワイトシチュー、コールスローサラダ(6.5%)

C 少し自炊大学生+食べる専門自宅生
ハンバーグ、ポテトサラダ(6.2%)

()は廃棄率

成果

通常の料理コンテストとは異なり、経験値の違いなどを気にせず、誰でも参加できる。逆に先入観がない方が素直に工夫できる。調理の安全指導や段取り等の指導のためトレーナーとプラごみや除去部分の計測のための担当と、調理作業全般のアシスタントを配置。記録、計測者を別に設定することが重要。



野菜の皮のむきすぎなどによる食品ロス(過剰除去)が、調理の工夫や意識の変化でどれだけ減らせるかを検証。全てのチームにキャベツがあり、キャベツの芯まで細かく刻んで全て使い切ってハンバーグに混ぜ込むことで、廃棄率を6.2%まで抑えることに成功し優勝!

キノコや野菜など、除去部分のある食材を準備。どれくらい過剰除去を行っているかを検証できた。食材の調理法や可食部(可食方法)についての知識を得ることができ、多様な世代や職種のコミュニケーションが行われた(コミュニティの形成きっかけ作り)「無意識ならもっと捨てていた」「意識するだけで、こんなにゴミは減らせる」



「皮はどこまで食べられる?」「芯も刻めば具材になるのでは?」。調理中は、普段捨ててしまう部分をどう活かすか、真剣に相談する声。調理後の野菜くずの重量計測の結果、すべてのチームで廃棄率が10%以下に!

- 日時 2025年12月23日(火)
- 場所 放課後等デイサービス「あしたのつばさあるす」
- 参加者 子どもたち、先生(計18名)

キャベツとロマネスコの「丸ごと食べ切りチャレンジ」に挑戦しました!「とにかく刻んで、全部いただく」を合言葉に、普段は捨ててしまいがちな芯や葉っぱも余すことなく調理。自分たちの手で切って炒めたり、レンジアップしたり。みんなが残さずおいしく完食しました。

なんと廃棄は「0g!」



甘くて美味しい若松キャベツ ✨
みんなで丸ごと食べる活動は、おどろきの美味しさと、子供達の中に、地元野菜を強烈な印象を付けます。まるごとチャレンジは、フードパントリーのときに食べ方紹介、をすることで取り組んでいる。

フードドライブ・フードパントリー 参加型啓発活動

目的	イベント会場、子ども食堂会場等で「食品ロスをへらそう」の啓発活動を行う。認知率向上。
実施日時	2025/7/15-2026/1/17
実施方法	<ul style="list-style-type: none"> ・フードパントリーで配布されたものの食べ切り啓発と重量計測 ・過剰除去防止啓発と食品配布 ・コンポスト広報を行い サンプルの基材を配布
対象	北九州市 周辺など 活動会場にて 延べ活動日数 109日 参加人数 参加者総数 (対面) 4724人



参加呼びかけのチラシ。「シヨクロス」登場！

成果



水環境館へのおでかけフードパントリー人通りが多い館内で、知る機会を提供する。フードパントリーや子ども食堂は貧困対策（なので自分は無関係）と考えている人が多いので、食品ロス削減の取り組みで、誰でも貢献できる活動であることを伝える。

HPで行っている、「食ロスクイズ」の公募告知パネルも展示 ▶



フードパントリーの参加者（一般家庭、高齢者、大学生も対象）に、全て対面アンケート参加を依頼し、参加するだけで「できることや関心が増える」機会を作る。

質問内容は、世代別の回答しやすさ、参加しやすさを重視して、作成した。まずは、アンケートに参加することから、知る機会を提供する、ことを目指した

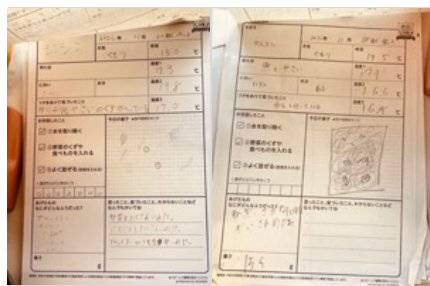
活動に先駆けて、北九州市子ども若者生育課発行の体験活動パンフレット「キッズチャレンジ」（市内前小学校関係施設配布5万部発行）に取り組みの紹介、同じデザインで専用チラシを作成し、各所へ配布を行った。実際に活動現場となった多数の子ども食堂や学校、会場などで事前に配布し、活動当日も参加者全てに手渡ししている。

コンポスト活動

目的	竹100%の基材を使用したコンポストのモニター調査。それぞれの活動希望者にヒアリングを行い、活動開始前に、事前研修を対面で実施し、適宜伴走支援を行う。
実施日時	10月ごろからモニター募集を開始。活動は継続中 実施場所 市内各所
実施方法	希望者にキットを提供し、実施状況調査 コンポストに与える予定の食品や頻度、置き場所などを想定し、対応の具体的な頻度や方法などについて相談し、不安な点などを、その都度丁寧に解消しながら活動を進める。
対象	小学校での取り組み（5年生2クラス、教員、校長室） 高校での取り組み（2校）放課後等デイサービス（1事業所） 一般モニター 20件（2歳～70歳代）

成果

- 様子を見守っていく。コンポスト活動者交流会は、とても良い出会いとなっていた。
- それぞれの場所で、楽しみながらゆっくり取り組むことができ、全て非常に順調に成長。
- 初めは心配事がたくさんあるが、少しずつお世話に慣れて余裕が出てくる。終始「失敗はない」ことを伝えて励ます。



星ヶ丘小学校の5年生は調理実習でいりこの出汁をとりました。



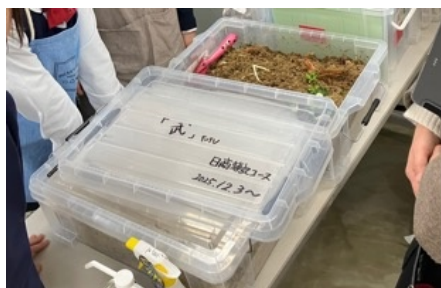
2校の高校でも誕生しました。戸畑高校では、毎週た多くの野菜クズを与えています。



放課後デイで、「竹千代」「てんさい」誕生の瞬間。みんなで名前を決めました。初日には、「柿の皮」をあげました。



一般モニターのみなさんにはフォームや対面で状況報告をしていただきました。さまざまなドラマがあり、HPで共有していきたいです。



12月28日に、環境ミュージアムで、他校の生徒がお世話をしているコンポストの「たけしくん」を見せていただき、意見交換をしました。「たけしくん」では、生ごみから芽が出ていてかわいかったです。コンポスト仲間がいると思うと、嬉しくなりました。
(参加した高校生の感想)

冬休み期間など、お世話を全くしないお休み期間もあり、のんびりとお世話しています。小学校での取り組みの際には、給食の調理員さんにも協力をおねがいしました。それぞれの場所で、たくさんの方が関心を寄せてくださいます。ちょっと挫けそうになる時も、あるけれど、小学生、中学生、高校生も、とても楽しんで、活動しています。各家庭のコンポストたちも順調です。(初心者は、夏より冬の方が、始めやすいです。)

コンポスト活動 その1 星ヶ丘小学校でのとりくみ(1)

目的	4年生の環境学習で、本市では回収された家庭ゴミは全て分別することができ、生ゴミだけは分別ができず焼却処分されていることを学んでいる。5年生のSDGsと3Rの学習から、焼却されているゴミをどうやって減らせるか、をクラスで考えた結果、「コンポスト」に取り組むことになった。リデュースが最優先で、サイクルの中に資源をとどめるには、焼却ゴミを出さない、ということ子どもたちは理解して取り組んでいた。
実施日時	2025/10/24開始 継続中
対象	北九州市立星ヶ丘小学校 5年生1組2組 60名 合計12基 大型2

活動の様子



導入は1コマ授業を実施。各班で記録の手順を確認し、当日の給食のみかんのかわを各班投入した。以降のお世話は、休み時間などで活動。振り返りのまとめのための授業を1コマ実施。



校長先生や、給食の調理員さんに協力していただき、給食の野菜の調理クズを提供していただきます。職員室でもコーヒー専用のコンポストが誕生。ベランダでひなたぼっこをさせる、職員室のコーヒー殻をいれる、牛乳を入れると匂いがキツくなる、などお世話のコツもわかってきました。



家庭科の授業で調理実習があり、野菜をどう切るか班ごとに話し合いました。野菜クズは、それぞれの班のコンポストにいれます。出汁を取るためのいりこ、の頭や背骨、わた、を、コンポストに入れた班、全部食べてしまった班などさまざまでした。

星ヶ丘小学校	開始からの投入重量 (g)						
/班	1	2	3	4	5	6	合計
5年1組	1311	1832	1936	2470	1470	1262	10281
5年2組	1630	1450	746	1405	985	1440	7656

授業では、国語で残食について調べたり、家庭科の買い物の所でエシカルな消費やSDGsを学んだりしている。観察期間中に調理実習では、各班の野菜くずをコンポストに与えた。

班ごとにコンポストのお世話は任されている。なにをどれだけ与えるか、いつどう世話するかは、班ごとに異なる。(世話は、基本的に休み時間などに行う)給食室からの野菜クズの引き取りは、まとめて代表が行うが、それぞれのコンポストになにをどれだけ、どのように与えるかは、任されている。(与えなくても良い)コンポストは、生きていますので、様子をよきみながら、世話をするように、ということだけが伝えられており、時々様子をみにくるあそけんのスタッフと相談しながら、与えるものを検討したり、基材を足したり、コーヒー殻を加えたり、している。

実際に、給食に使われている野菜に関心を持つようになったり(それ以前は、給食にどんな野菜が入っていたかを尋ねても、あまり答えられなかった)調理法や、取り除かれた部分である生ゴミの量などに、関心が持てるようになってきている。活動に際して、子どもたち用に観察記録表や導入の手順を記載した資料を制作し、これらをふまえて、大人用の解説パンフレットを制作した。

コンポスト活動 その1 星ヶ丘小学校でのとりくみ(2)-1

活動のながれと様子

<活動全体の流れ>

学校へのこれまでの研究の報告と、取り組みの概要の紹介
授業のタイミングの調整と資材手配等

授業計画の提案

導入授業 活動開始

子ども達の実践のためのコンポストパンフレット

手順に基づいて活動開始

活動継続と展開

給食のやさいくずの引き取りについて調整・実施

適宜巡回し、観察と相談支援を行った。

* 随時必要な調整を校長先生と担任の先生にお願いしながら活動

* 設置場所の調整

* 調理実習との連携

* 学校解放週間での保護者や地域の方々への紹介

* 専用HPでの活動紹介

中間記録とまとめ

はじめと今を比較して、子どもたちそれぞれの状況のまとめに
取り掛かる。

「すてられるまえに食べ物をすくおう」冊子をきっかけに、活
動の様子などを班ごとにまとめる活動を実施中



昼休みに、給食室から野菜クズを引き取ってきて、
班ごとに、コンポストに野菜を与えている。日によ
り、手付かずの米飯、パン、牛乳なども。

<学校での進め方>

5年生の3Rの学びを進める中で、生ゴミを資源として循環させ
ることができる「コンポスト」に取り組んでみよう、という発案
がでたことを受けて、取り組みを開始することになった。

担任の先生と相談し、コンポストに与えることができるものが、
給食で出るタイミングを探し、「みかん」が提供される日に活動
開始。

子どもたちが、活動を通じて、気づいていくことを大切にするた
めに、初めは材料の準備方法と手順だけを伝える。

初日は

竹肥姫の簡単な紹介をこれか
ら取り組むことの概要を説明

「コンポスト」に名前をつ
けること

若干の水を与えて混ぜ

温度を測り(室温・基材)

記録すること

みかんの皮の重さを測り、

与えてよく混ぜる、

ことを行った。



* 竹肥姫が「竹」でできている
ことを説明するために、素材と
して「竹スコップ」を準備した。
途中でかびたため金属のスコッ
プに変更。



廊下のロッカーの上にちょうど6班分収まった
ところ。星ヶ丘小の廊下は広く、活動しやすい。

<竹100%竹肥姫によるコンポスト活動>

竹を機基材としたコンポストは、様々なものがあるが、
ここでは「竹肥姫」という商品を使用している。
製造メーカーの株式会社林田産業様の指導の下、福岡
県内の複数の小学校での活動実績がある。

あそけんの取り組みとしては、福岡県リサイクル総合
研究事業化センターの研究チームの一員として(R4-
R7)近隣中学校、畑、家庭モニター活動などを実施し
ている。

小学校一学年規模での活動は、初めての試みであるが、
授業の進捗、調理実習などのタイミング、学校行事や
給食活動の状況、長期休暇、など様々な要素について
の調整が必要となる。丁寧に相談、調整をしながら、
活動を見守り、継続するための工夫と支援が必要。

コンポスト活動 その1 星ヶ丘小学校でのとりくみ(2)-2

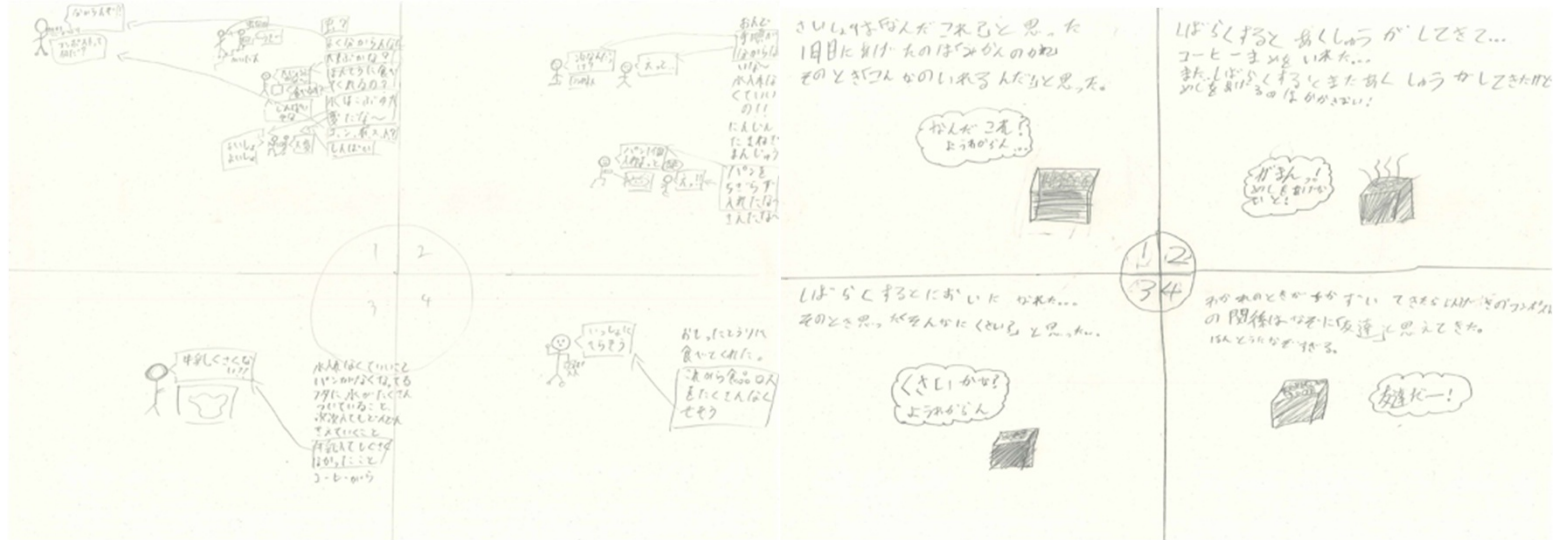
子ども達による活動のまとめ

お世話開始から、2月ほど経過し、班での取り組みを振り返り、まとめるために、ワークを行った。これまでのお世話の方法や記録方法などについては、班ごとに任されており、随時、質問応対や子どもたちの求めに応じた助言はしているが、指示指導、はしていない。学級担任も、「よくわからないから、(こんどあそけんさんが来たら)きいてみよう」というスタンスで、最終コンポスト自体をよく観察することを促しながら活動を進めている。はじめは戸惑っていたが、班であれこれとお世話をするうちに、班の仲間、食口を一緒に減らす仲間として受け入れられていっている。

4コマのテーマ

出会い
 どんなお世話をした?
 え?なんで?とおもったこと
 驚いたことや不安になったこと
 いまとこれから

▶中間まとめのワークでは、
 出会いは疑問と不安
 食べ物を与えて様子を見ながらお世話をし
 ちょっとびっくりしたこともあったけど
 今は班の仲間で「ともだち」
 班一員、という理解をしている



コマめ 「一緒に減らそう」思った通りに食べてくれた

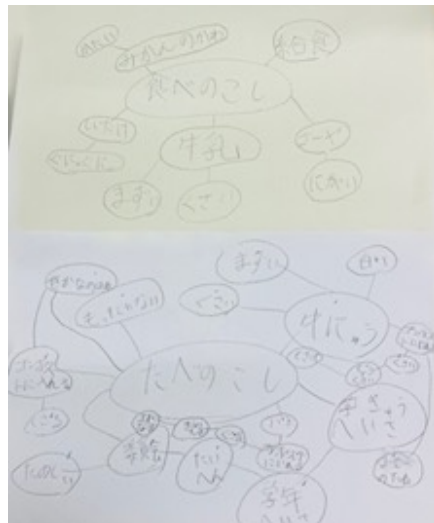
コマめ なぞに「友達」におもえてきた

イメージマップによる出現単語数の変化

活動開始時点と2月経過後の比較

▶上事前 下事後
 語彙数が増大し、活動で出会った野菜クズが想起されている。
 語彙数：1組60%
 2組55%増

子どもたちは、自分たちのコンポストのことを給食放送で他の学年に伝えたり、学校解放週間に展示や給食の調理クズをコンポストに入れる活動を行うなどして、保護者への紹介も行なっている。活動前後のイメージマップ調査では活動に関連した発語が増え「食べもの」「食べのこし」という言葉からの想起に実際に活動で扱った野菜クズや、「食品ロス」「コンポスト」という言葉が出現するようになり、語彙数自体が1組60% 2組55%増。(1組25人、2組29人)



冊子の紹介記事

冊子への感想やこれからについてもたくさん意見をもらった。

コンポスト・食ロスクイズを考えてもらった。

小学校での竹100%コンポスト活動

日程 2025年10月～進行中 場所 北九州市立星ヶ丘小学校

2025年10月下旬より、北九州市立星ヶ丘小学校の5年生が「食べものレスキュー大作戦」の一環として、コンポストによる堆肥づくりに挑戦しています。給食室から出る野菜くずや、未開封のパン、牛乳を微生物の力で分解し、ゴミとして捨てるのではなく「栄養たっぷりの土」として循環させる取り組みです。子どもたちは班ごとにコンポスト箱に名前をつけてお世話します。昼休みに給食室へ野菜くずをもらいに行きます。「今日は何あげようか?」「栄養バランスよくいろいろな野菜をあげよう」「昨日入れた玉ねぎが溶えてる!」温度や臭いをチェックし、生き物を育てるように可愛がる姿が印象的でした。「甘いのが好きみたい」「日光浴させよう」など、日々の観察から多くの発見が生まれています。校内には校長先生が管理する大型コンポスト「しんしん」「ファンファン」や、職員室にはコーヒー専用コンポストも設置され、学校全体で楽しみながら活動が進んでいます。「たった1gでも、みんなでやれば大きな力になる」、自分たちの手でゴミを資源に変える体験を通じて、子どもたちの心には、食べものを大切に、循環させる豊かな感性が確実に育まれています。 ※1月中旬までに、2クラス12基合計18kg投入完了



コンポスト活動 その2 戸畑高校・高陵高校・放課後デイでのとりくみ

目的	高校生自身のSDGSと3Rの関心から、コンポストに取り組んでみたいとの申し出があり、活動を開始。堆肥は学内の花に与えて化学肥料を削減する予定。 放課後を、少人数で一軒家で過ごす、放課後デイサービスでは、頻りに調理をする活動が行われており、その際に出る野菜クズをコンポストで減らして肥料にすることを旨す。
実施日時 対象	戸畑高校 2025/10/24開始 継続中 3基 高陵高校 2025/12/3開始 継続中 大型2基 放課後デイサービス あるす 2025/10/28開始 継続中 2基
実施方法	置き場所や作業内容などを検討し、実施。調理実習や学食、職員室など校内で発生する生ゴミを減らすことが目標。

活動の様子

戸畑高校家庭クラブ



戸畑高校家庭クラブでは、2022年に学内でフードパントリー活動を開始。以降、さまざまな取り組みを積み重ね、今回はコンポストに挑戦。家庭科室で調理実習の際に生ずる、野菜クズと職員室から出るコーヒー殻を家庭科室内に設置したコンポスト3基に与えています。
戸畑高校では頻りに調理実習があるので、なるべく生ゴミのでない調理を学んではいるものの、多くの野菜クズが出ていることがわかりました。

普段はそれぞれの場所で育てられているコンポストですが、交流会では3つのコンポストをお世話している仲間と、他のコンポストを育てている仲間も加わり、それぞれのコンポストについて、紹介しあったり質問しあったりして、とても楽しい出会いとなりました。

高陵高校



高陵高校では、学生食堂から出る、野菜クズと、職員室から出るコーヒー殻を与えています。

放課後デイサービス あるす



放課後デイあるすのキッチンで、かわいがられている「てんさい」「竹千代」の2基。一軒家のキッチンでは、ごはんやおやつをみんなで作ります。「なるべく食べきる」を目標にみんなで工夫しても、どうしても食べられ

なかったところは、「てんさい」と「竹千代」にあげています。
さつまいもの根っこから、芽が出てきたり、みかんの皮が緑にかびたり、びっくりするけど、毎日眺めていると、楽しくなってきます。

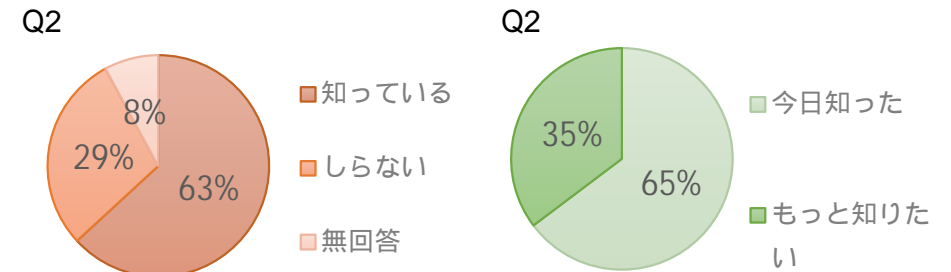
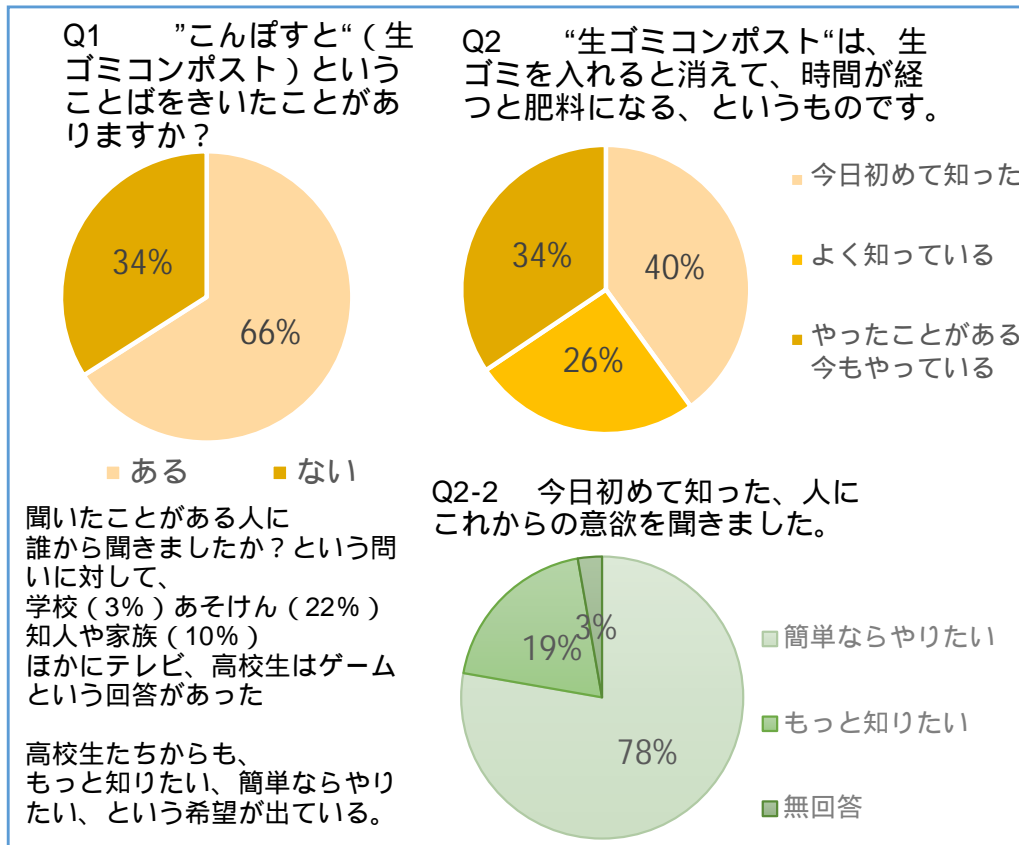
10/28誕生		投入量(g)	
お世話日	てんさい	お世話日	竹千代
10月28日	1,585	10月28日	50
10月31日	80	10月29日	135
11月1日	350	10月30日	152
11月3日	115	11月1日	250
11月6日	150	11月6日	160
11月14日	135	11月14日	130
11月19日	150	11月24日	100
11月24日	60	11月29日	1,160
11月29日	1,165	12月11日	30
12月11日	50	計	2,167
計	3,840		

コンポスト活動 その3 コンポストヒアリング&アンケート調査

目的	「コンポスト」という言葉自体の認知率、興味関心の様子や、取り組み状況などを把握する。
実施日時	2025/10/12-2025/1/17
実施方法	子ども食堂やフードパントリー体験参加、食ロス啓発展示活動会場で竹100%コンポストの展示を行いながら、対面のヒアリングとアンケートと実施。興味があると、申し出てくださった方々のみへの対応。 毎週家庭科で調理実習を行っており、家庭科室でフードパントリーや子ども食堂、サルベージクッキング活動など実施。家庭科室では毎週の調理実習の際の野菜クズでコンポストを育てている。活動参加者にアンケートを実施。毎月校内でフードパントリー活動を実施中のインターアクト部の学生にコンポストについて説明した上で調査。
対象	市内各所 活動会場にて 戸畑高校 若松高校 集計総数 150組 (97組 38人 15人)

集計結果

- 3割以上が、「コンポスト」という言葉自体を聞いたことがない人で、詳しい内容を今日初めて知ったという方が4割。
- まず伝えることの重要性がわかる。
- 説明を聞いて8割以上の方が「簡単ならやりたい」と意欲を示すことから、丁寧な周知と啓発は非常に有効。



Q3 生ゴミを減らすために、日頃行動していることは？（複数回答）
食べきれないものや、生後ゴミが出ないように工夫したり、みんなで協力したことはありますか？
コンポスト活動に取り組んでいる人たち 78%
初めて聞いた、やったことがない人たち 58%

Q4 ”生ゴミコンポスト“をやりたくない理由は何ですか？

知らなかったから	44%
やりかたがわからない	12%
むしがいや	9%
場所がない	5%
てまがかかる 時間がない	26%
高い	5%

興味のある方々にやりたくない理由を自由記述で尋ねたところ、詳しく記入してくださる方がほとんど。

大半が対面でヒアリングを行っており、実施に至るまでの課題として、不安や手間を訴える方が多く、その点の解消がはじめての一步につながる事がわかりました。丁寧な伴走で着地が実現します。 27

コンポスト活動 その4 啓発資料

子どもたちの実践のためのパンフレット制作
 小学校高学年を想定して、コンポスト活動を「はじめ
 るためのパンフレット」を制作

* こどもたちには、やってみて考える、ことを提案している

コンポストは(ここでは、「なまごみがきえる?ふしぎな箱」)、生き物なので、一つ一つ違う成長を遂げる。クラスの班ごとに取り組むことで、仲間で相談しながら世話をすると、それぞれの様子は異なることに気づく。

* 正解はないということをまず伝える初めに、全部違うので、失敗も正解もない、ということをしかり伝えながら、興味を持ってお世話をし続けることを励ます。

子ども達向けの導入に使用するパンフレットには、結論や解説はない。活動の過程で、子ども達の疑問から、少しずつ対策や解説を伝え、子どもたち自身の気づきを大切にした。

大人のためのコンポスト紹介のパンフレット制作

* ハードルを下げ、素直な興味を前向きに励ます呼びかけ。

一般向け紹介パンフレットでは、結論を先に記載している。ここでも「コンポスト」という言葉は極力減らしている。

3Rの視点から、生ゴミがなくなる、ということの重要性を紹介し、「コンポスト」という言葉をあえて使わずに活動の意義を紹介している。

コンポストについての調査では、手間やお金がかかる、場所が必要、というマイナスイメージが強いこと、失敗したというトラウマが再度のチャレンジを妨げていることなどがわかっている。

もともとコンポストに少し興味があった、という人向けの丁寧な解説と、簡易な材料で行うことができ、手間がかからないことを強調している。

1グラムでも焼却処分を減らすことが目標なので、はじめの一步を励ます内容となっている。提案しているキットは、いつでも土壌改良剤として土に還すことができる竹100%の素材で、ボックスも別への活用が可能な一般的なものを使用している。いつでも初めて、いつでも辞められる。途中のお休みも自由で、ずっと世話し続けても良い、再開も自由、というのがこのコンポストの最大の特徴。一般家庭で実践する場合、まず大人の理解を得ることが必要なため、大人向けに安心して始めることができ、いつでもお休みできて、いつでも辞められる、ことを伝えている。

特設HP SNS

目的	特設HPで食品ロスについての啓発や、活動の案内・報告、活動経過報告などを行う。 あそけんの子ども食堂やフードパントリー、体験活動の活動案内を行うメルマガやSNSに取り組みを発信。 同時にチラシによる案内を実施。子どもたちやHP・SNS が届かない層への周知とHP存在の周知が目的。
実施日時	2025/11月中旬公開 URL: https://www.asobitomanabi.org/frm/
実施方法	・ アンケート参加募集 随時関心のある人々へのおすすめ 他での活用提案。結果の共有。 ・ ブログでタイムリーな現場の状況を発信。 ・ メルマガ 既存の活動参加者への告知を行う。同時にSNSでも発信
対象	HPアクセス 2000件 * アンケートやブログは別リンクのためHPアクセスとは別 ブログアクセス数 370

成果

- HPに具体的な取り組み例を紹介。活動の様子をブログで紹介。SNSでも、発信。
- 若手にはQRコードからの案内は、取り組みやすいと好評。（一部活動会場でアンケート回答を実施）
学生向けのアンケートサイトを公開し、参加を促した。高校生や大学生などが回答しやすい環境を整えられた。
- 大型会場での活動は、多くの参加者受け入れが可能であるため、大量のチラシを配布し、外部のネットワークなどへもメール案内協力をお願いした。



HP トップ ブログ以下に活動案内 活動報告と続く



知らないことがわかるようになるのは楽しい。知らないことを参加して楽しみながら理解していく。クイズは、子どもたちにもとても好評で、一緒に考えてもらい増やしていく予定。



子どもたちにわかりやすく、子どもたち自身が楽しみながら、興味を持つことができ、大人が子どもに伝えやすい、デザインをめざした。段階的にステップを踏みながら一緒に活動しよう!と誘っている。行政や、学校、地域、小さな活動のつながりなどを通して、多数の協力が得られ、無理なく、多方面への周知を行うことができた。取り組み自体に関心を持ってくださる方々と出会うことができた。

特設HP SNS アンケートサイト

実施概要

- ・実施日 2025/11月中旬より順次調整公開
- ・実施場所 <https://www.asobitomanabi.org/frm/>

事業概要

特設HPで活動の啓発や、紹介、募集などを行いながら、活動参加者に声をかけて、アンケート参加を募った。アンケートサイトは実際に学生や子どもたちに意見を聞きながら調整を行った。メンテナンスが容易な構造になっているので今後も継続して活用できる仕組みになっている。

成果

- 特に、高校生や大学生へのwebアンケートは回答しやすい環境を整えることができ、有効。
- アンケートの回答項目に、「なにをしたらいいかわからない」の解が提案されている。
- アンケートに参加するだけで、「食品ロスを減らすために、なにをすればいいか」を知ることができる。

DATA

食べもののレスキュー隊 アンケート調査

食品ロスのこと、みんなのくわい知っているかな？
まだまだ調査続行中！！ 皆さんもご協力お願いします。

(子ども用) アンケートに答える (学生・ユース用) アンケートに答える (大人用) アンケートに答える

調査期間 2025年10月31日~11月3日
回答総数 57名(大人37名・子ども20名)

認知度・経験について

大人 vs 子ども「知ってる？」対決！

質問	全体	大人	子ども
「食品ロス」という言葉を聞いたことがありますか？	64.9%	89.2%	40%
「フードドライブボックス」を見たことがありますか？	41.6%	67.6%	15%
「フードントリー」に参加したことがありますか？	27.3%	35.1%	20%
食べものをすてないように工夫したことがありますか？	50.6%	75.7%	25%

大人の得意技は「お買い物！」

食べる分だけ買うようにする ……43.2%
見切り品から購入する ……37.8%
手前から買う(てまえどり) ……21.6%



大人はスーパーでの「賢い選択」で食品ロスを減らしています！
「冷凍保存」を駆使しているのも大人の特徴です。

子どもの得意技は「完食！」

食べ物を残さないようにする ……75%



子どもたちの圧倒的1位は「残さず食べる」こと！
目の前の食事を大切に食べる姿勢、大人も見習いたいですね。

みんなの「失敗談」と「工夫していること」

みんなの失敗談

- 冷蔵庫の奥で賞味期限が切れてしまった…
- 作りすぎたカレーを凍らせた…
- 夏に溶けたチョコを捨てた…
- 野菜を腐らせた…

みんなが工夫していること

- 作りすぎたカレーは、凍らせるかリメイクする！
- 食べられないさうだつたら、食べる前に減らして、食べられる人に贈る
- 見切り品から購入する

まとめ

「知っている」から「やってみる」へ。

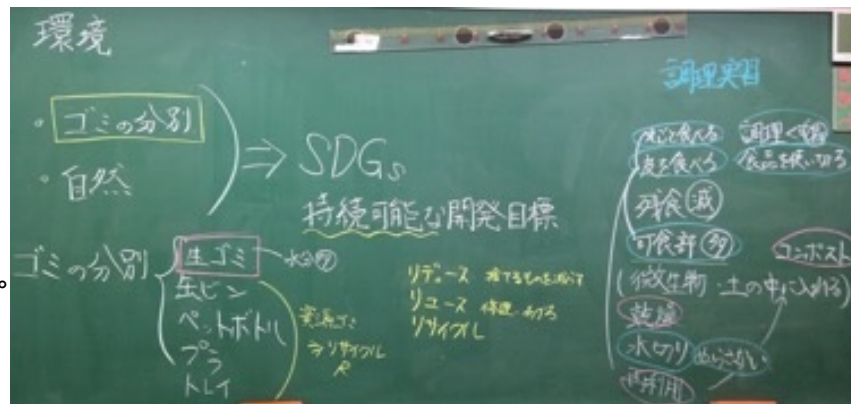
アンケートにご協力いただいたみなさん、ありがとうございました！
今回の調査で、北九州のみなさんの「意識の高さ」と、大人と子どもそれぞれの「得意技」が見えてきました。
大人は「賢い物上手」▶必要な分だけ、賢く買う！
子どもは「完食マスター」▶目の前の食事を、大切に食べる！
実はこれ、最強のチームワークです。
お家の中で、大人の工夫と子どもの頑張りをシェアし合えば、食品ロスはもっと減らせるはずですよ。
「知っている」から、「やってみる」へ。
小さな行動が、地域全体を変える大きな力になります。
次回の結果発表で、みなさんのアクションがどう数字に表れるか楽しみですよ！

- ・Webアンケートは、活動を通じて子ども用、ユース用、大人用、の3種類が制作された。
- ・サイトで紹介しているアンケート結果は、対面で実施したもの。
- ・リアルな仲間の存在を、伝えながら、離れた仲間と繋がるきっかけを作りたい。
- ・対面でのアンケートが難しい、出会いにくい層へのアプローチが可能となった。
- ・学校やゼミなど、集合機会のある集団に対して、ガイダンスとセットで実施すると効果的。
- ・WEBアンケートフォーム実施現場や対象に合わせて、細かい調整が可能。

子ども食べものだいじブック 食べものレスキュー大作戦

「すてられるまえに たべものをすくおう」の制作

星ヶ丘小学校5年生との取組を踏まえて、ブックの制作を行った。北九州市では、SDGsの視点から、ゴミの分別の課題として、4年生の学習で「生ゴミ以外」は「分別できて、リサイクルできる」ことを学んでいる。環境と3Rを学ぶ中で、子どもたちから、「コンポスト」という言葉が見つかった。「生ゴミを減らす」方法として、他に「(野菜の)皮ごと食べる」「食品を使い切る」「可食部(を増やす)」などの気づきがあった。5年生での新たな取り組み課題として、3Rの視点から、生ゴミを焼却することなく、循環させる工夫として「コンポスト」に取り組んでみたいと、発案された。学校の給食の野菜クズをコンポストに入れてゴミを減らす活動しながら、調理実習やフードパントリーなど、食品ロスの発生原因と減容方法などについて、学びを深めていった。取り組みをまとめる形で、ブックはデザインされた。



制作した冊子と参加者の反応

星ヶ丘小学校5年生が、「コンポスト」に取り組むきっかけとなった授業の板書。

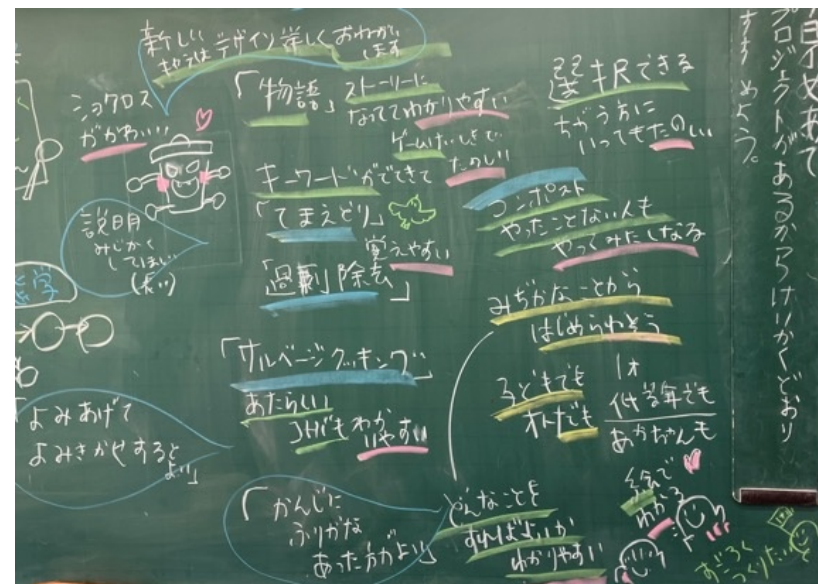


「すてられるまえに食べものをすくおう」を班で読み合っている星ヶ丘小学校での様子(5年2組 児童28人参加)

コンポスト活動を行っている班ごとに「すてられるまえに食べものをすくおう」冊子をよみあい、感想を出し合った後、ワークシートに記入

- ・のこしません隊長に伝えたいこと
- ・冒険の続きがあるとしたら
- ・なるほど、いいね!と思ったこと
- ・なんで?もやもや 疑問やもっと知りたいこと
- ・これからやってみたいこと
- ・新キャラの提案

例 たべきり子次長「お腹が空いてていぶくるブラックホール!」
ショクロスの仲間「ザンショク」食べ残された食べ物達が暴走



<結果と分析>

ワークシート出現単語

コンポスト 26人 食ロス 10人 過剰除去 6人 てまえどり 5人
サルベージクッキング 4人 フードドライブ 1人

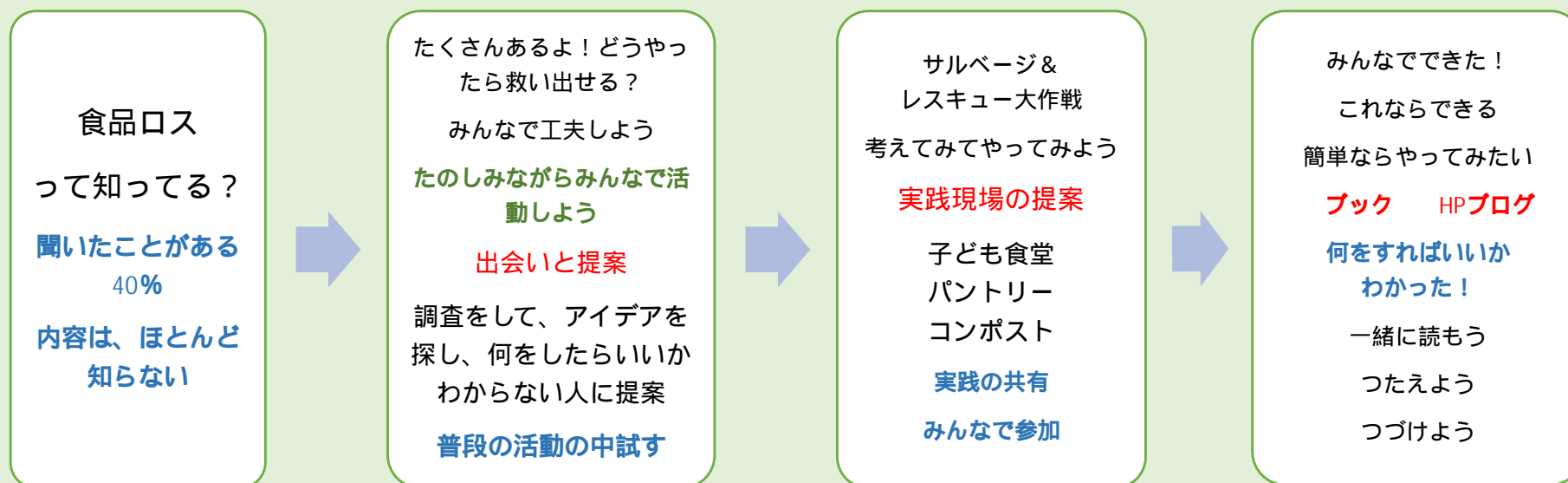
コンポストについての疑問やこれからのことが多く書かれていた。

- ・「コンポストが一番好きな食べ物を探す」
- ・「コンポストのクイズをもっと増やした方がいい」
- ・コンポストを知らない人でも、この本を読んだら、はじめたいとおもっちゃう

5. まとめと成果

- 食品ロスが家庭内で発生する時点に注目し、今すぐできる行動について、対面やアンケートで具体的に提案することができた。
- 子ども食堂やフードパントリー等の日常的に参加しやすい現場において、気負わずたのしみながら、食品ロス削減に直結する**体験機会を提供**。**みんなの効力**を実際に記録計量することで、みんなの協力が積み重なっていることをみえる化し、継続的に前向きに取り組むことを励ますことができた。
- 実践の過程で得られた気づきや反応を整理し、家庭系食品ロス削減の**取り組みを広げていくための基盤**として、特設HPや冊子を制作した。

子どもたち・市民自身が自分で動いて自分で気づく機会の創出



子どもたちが仲間とめざすのぞましい未来

6. 今後の課題 (概要)

家庭における食品ロス削減活動の持続的な拡大には、(1)知る(2)体験・行動する(3)体験に基づいた理解と活動の主体としての成長(4)仲間を広く募りながら、活動を継続拡大していく 4つの段階が考えられる。

この取り組みでは、主に(1)ろ(2)をなるべく多様な現場で実践し、知見を得ることができた。見えにくかったユース層の意識や行動や、コンポスト活動の拡大可能性も確認された。

食品ロスを知らせる

(1) 認知の拡大

一般の参加者に対してアンケートを取ると、「食品ロス」という言葉自体の認知率も20%程度。

未然に知る 機会の提供 とりのこさない 少しでも早めに伝えるために

いかに、伝わりにくいところに、伝えていくか、という、具体的な方法をペルソナ別に計画する。

保育園や学校、福祉施設や企業、地域など、あらゆる機会を捉えて、知らせる努力が必要

実体験・活動機会の提供

(2) 体験・行動・活動

参加体験機会の提案

たのしく簡単で誰にも開かれている参加機会
1グラムでも減らせた！

みんなでのよこびあえる活動

どこでも再現可能なシンプルでコンパクトな活動のパッケージ化と共有

例：フードパントリー+ドライブ+学習

作って食べるサルベージクッキング体験+パントリー

サルベージ子ども食堂(共食)+パントリー

リピート希望ほぼ100%

中間支援の提供が必要！

既にある学校や子ども食堂などの活動機会には、新しい取り組みを受け入れる余裕がない場合がほとんど。個別の余裕のない現場に活動を浸透させるためには支援が必要

(3) 一人ひとりの理解と成長

個々の生活、所属などに応じた、日々のとりくみについて自ら考えられるようになる。個人の気づきをチームにボトムアップできるようになる。

特に、**子どもたちの活動では、子どもたち自身の学びや育ちを丁寧に見守る姿勢が必要**

(4) 変化しながら仲間と継続

やってみたこと、きづいたことは、表現し、伝えたい。コンポスト活動を行っていた子どもたちは、給食放送で全校に発信したり、学校間交流で自分たちの取り組みとして、発表の内容に選んだりしている。

良質で新鮮な情報のアーカイブと発信

みんなが動いている様子が伝わる

6 . 今後の課題 (内容)

- 「食品ロス」という言葉自体を知らないので、伝える必要がある一方で、食べ物にまつわる行動の個別化から、「わけあうことが困難」という状況が生じている。分断が障壁となり、その隙間で食品ロスが生じていることがわかった。各活動を通して、買う人、食べる人、などフェーズのつながりが分断されていることで、食ロスが無意識に行われている。対策としては、この分断をつなげていくこと、もしくは、そのフェーズごとの知識を伝えていくことで、つながりを認識して、食品ロスに対する意識や行動を変容していくことができると考えられる。
- この取り組みでは、子ども食堂やフードパントリー等の継続的な活動現場において、**体験型の取り組みと意図的な対面での伝達**を工夫することで、多世代に食品ロスへの**認知のきっかけを創出**することができた。子ども食堂は全国に1万ヶ所以上、増加傾向にあり、フードパントリー活動も盛んであることから、他での展開が期待できる。
- 「知る」方法や内容と、「具体的な行動の提案」が同期していないので、具体的な行動に繋がりにくい。学校給食では「のこさない」指導はあっても「残りそうなものをわけあう」「どうしても残ってしまったもの取っおいて誰かが食べる」「(生ゴミを取り置いて、教室の中で保管する)コンポスト化する」といったことは原則禁止である。未開封の牛乳さえ、給食時間の直後にパッケージを開けて即座に廃棄している。たべものを大切に、ということとは程遠い指導がなされている。
- 「食べ物を無駄にする」ことを、責められそうな現場には参加したくないので、活動が広がりにくい。「たべきりちゃれんじ」は、昔ながらの「おすそわけ」の現代版で、みんなで協力してフードシェアやサルベージを行う。活動への参加方法は多様で(持ち帰りや、食品提供など間接的な参加も可能)、みんなで集うことで活動を通じてたのしみながら、一人ひとりが前向きに貢献でき、さらに学ぶことができる機会となる。
- 活動自体が、認知されていないため、既存の仕組みやルールを見直すことから始めなければならないケースが多いので、取り組みの案内や、実施状況報告、アンケート結果などのデータをウェブサイトでアーカイブ化して共有していく必要があり、そのための入り口を設計することができた。
- ブックは小学校高学年を中心に、こども向けとして制作した。もっとも反応がよかったのは狙い通り、小学校高学年であったが、多世代に対して反響があり、我が子や孫に与えたい、という要望も多かった。読み聞かせのなかで、子ども同士の異年齢の交流が生まれ、子どもたちへの説明が周辺の大人にも響いていくことが見てとれた。未来ある子どもたちから認知や理解を深めていくことで恒久的に食品ロス削減に寄与できると考えられる。

家庭での食品ロス発生状況は、非常に個別的な事象であるため、一方的な提案では、削減が難しい。生活のあり方そのものが激変する中で、個々の生活者に、すぐに実践可能な具体的な対応策が伝わりにくくなっている。既存の活動の中に、学びの機会を組み込む、子どもたちを中心に活動しながら、大人も学ぶことはとても有効である。困窮や生活困難は「繋がり不全」が根本原因であることから、対面での対話や、地域コミュニティのなかでのわけあいや、学び合い、の機会が全ての生活者にとって必要であって、そのことが食品ロスの発生削減と食品アクセス改善に直結する。

7. 事業の評価

消費者の行動変容等による家庭系食品ロスの削減モデル事業の講評

北九州市立大学 教授
社会教育学 恒吉紀寿

食品ロスや、それに関わる行動変容は、「もったいない」という観点を食生活の点検や中心に据えようとする意識向上や行動変容が取り込まれがちだが、この事業では、数値化や見える化しつつ、クッキングやコンポスト、フードドライブなどの周知や活用によって、食品ロスを出さない個人に終始することなく、食品ロスを減らしていく社会的仕組みの一員の自覚を促すことを大切にしている。

事業のなかでの調査も重要であったが、みんなで食べる、みんなで作ってみることで、食べることの楽しさを推進力にして、みんなで取り組む協働の意識へつなげたことは意義が大きい。食生活や食料品への意識だけでなく、社会貢献や社会の仕組みを理解し、それを知り、考えることで食を通じた環境意識につながりつつある。

生産者の声や取り組みにも、親子で関心を持ち、単に食品ロスだけでなく、生産と消費、安全な食、生産者を支える消費者という顔の見える関係を作り出していた。農業協同組合や生活協同組合、フードドライブや子ども食堂、学校と家庭という組織的な取り組みと異なる、ネットワーク型の取り組みの可能性を探ることができたと思う。食品ロスに関わる家庭での努力にとどめず、社会的な取り組みへの関心を高めつつ、その役割や責任を理解することは家庭でできることにとどまらず、家庭から生産や管理や流通などを考える主体が育つことを示している。継続的な参加や日常生活への変容、実務連携に移行する会員制の産直へのかかわりなども見られた。

ただし、実験的な小地域でのモデル事業にとどまっているため、今後の継続性や発展性も課題であるが、より広い地域などでの事業効果も含めて検証していく必要がある。それと同時に、子どもや家庭を結ぶネットワーク型の取り組みを、組織的な取り組みとの接続強化によって、より持続可能な社会的モデルとなることについても意識していく必要があると考える。

8. 事業終了後の展開

見えにくかったユース層の意識や行動や、コンポスト活動の拡大可能性も確認された。多様な人々が無理なく小さな取り組みを積み重ねることを励ましていきたい。

総じて、素直に前向きに取り組みたい、という姿勢が見て取れることから、小さなコミュニティ単位で気負うことなく、仲間とともに楽しみながら活動を継続していけるように、途切れることのない伴走支援を行うと効果的である。

食品ロスを知らせる

(1) 認知の拡大

「食品ロス」についてもっと知らせる。

会場にわかりやすい展示を行うことで、多くの人に知らせることができる。

「簡易でおもしろそうならやってもいい」という回答は非常に多い。
なにかしたいが、何をしたらいいかわからない、難しそうで失敗したくない、知らないことを責められたくない状態。

対象や機会を具体的に想定した
啓発活動モデル提案

実体験 参加 発信

(2) 体験・行動・活動

参加体験機会の提案
たのしく簡単で、誰にも開かれている参加機会のパッケージ化
1グラムでも減らせた！
みんなでよろこびあえる活動

活動会場に合わせた、再現可能なシンプルでコンパクトな活動の具体提案
パッケージ化と活動の共有の強化
活動希望場所・団体を公募

中間支援の提供
現場での展開・継続を支援

(3) 一人ひとりの理解と感心を育む

個々の生活、所属などに応じた、日々のとりくみについて自ら考えられるようになる。個人の気づきをチームにボトムアップできるようになる。

この取り組みの現場では大切にしたい
特に、子どもたちの活動では、子どもたち自身の学びや育ちを丁寧に見守る姿勢が必要

(4) 変化しながら同じ 拡大をめざす

個から個へ、個からチームへ 組織や活動は流動的なので、担い手を固定せずに、動的平衡を保ちながら試行錯誤し、広く繋がりを生み出しながら変化し続ける
まず目の前の人に伝え、繋がる機会を生み出す。

特設HP 参加型でリアルタイムの活動が見え
参加を促す発信・情報のアーカイブ

はじめの一步を促す啓発

であいとつながりの創出

なかまとともに継続

8. 事業終了後の展開

家庭における食品ロス削減活動の持続的な拡大には、(1)知る(2)体験・行動する(3)体験に基づいた理解と活動の主体としての成長(4)仲間を広く募りながら、活動を継続拡大していく、という4つの段階を、確実に積み重ねていく必要がある。この取り組みでは、子どもたちが日常的に行う様々な活動機会に「食品ロス削減」という視点を無理なく与え、活動を通じた学びを深めるきっかけを提供する方法が見出された。シンプルで、わかりやすいモデルとして完成させ、さまざまな活動現場にチューニングしながら継続的に活動を拡大していくことが可能である。

	活動方針	活動内容	ポイント
(1)認知拡大	「食品ロス」についてもっと知らせる 対象や機会を具体的に想定した 啓発活動モデル提案 はじめの一步を促す啓発	会場にわかりやすい展示を行うことで、多くの人に知らせることができ	簡易でおもしろそうならやってもいい」という回答は非常に多い なにかしたいが、何をしたらいいかわからない、難しそうで失敗したくない、知らないことを責められたくない状態
(2)体験・行動・活動・発信	参加体験機会の提案 であいとつながりの創出 中間支援の提供 現場での展開・継続を支援	たのしく簡単で、誰にも開かれている参加機会のパッケージ化 1グラムでも減らせた！ みんなでよろこびあえる活動	活動会場に合わせた、再現可能なシンプルでコンパクトな活動の具体提案 パッケージ化と活動の共有の強化 活動希望場所・団体を公募
(3)理解と関心の醸成	個々の生活、所属などに応じた、日々のとりくみについて自ら考えられるようになる	具体的な活動を積み重ね、仲間との経験を通じた個人の気づきをチームにボトムアップできるようになる	この取り組みの現場では大切にしたい 特に、子どもたちの活動では、子どもたち自身の学びや育ちを丁寧に見守る姿勢が必要
(4)活動継続拡大	まず目の前の人に伝え、繋がる機会を生み出す。 なかまとともに継続 離れた仲間とも、ともに活動	特設HP 参加型でリアルタイムの活動が見え参加を促す発信・情報のアーカイブ	個から個へ、個からチームへ 組織や活動は流動的なので、担い手を固定せずに、動的平衡を保ちながら試行錯誤し、広く繋がりを生み出しながら変化し続ける

7. 横展開へのポイント (1/3) 子ども食堂・フードパントリー

全ての子どもたちを取り残すことなく、食品ロスについて伝えていくには、各家庭の環境は個々に異なる 学校は過密なカリキュラムと、教員の働き方改革のため、新たな取り組みを組み込むためには時間がかかり、専門性も必要であることから、今回開発のツールなどを活用して次のステップを進める。

Step1 まず自由度の高い子ども食堂やフードパントリーの活動現場で、小さな実践を開始することが望ましい。

子ども食堂は増えてはいるが、辿り着けない子どももいるので、

Step2 学校や保育園、図書館や公民館など、既存の施設などでの小規模、単発の取り組みを検討する。

Step3 支援の必要な子どもたちのためには、放課後等デイサービスなどでの取り組みの可能性はある。

Step4 イベント会場での啓発展示、体験参加機会の提供を行う。

文化祭や学園祭、キャリア体験イベントや子ども祭りなど子どもの集まる場所での展示発表等は、取り組みが届いていない家庭にリーチできるチャンスである。一般市民や家族なども同時に参加するため多世代への訴求が可能である。

多様な人々が無理なく小さな取り組みを、子どもたちの今いる場所で積み重ねることを励ましていきたい。

様々な子どもたちと共に学ぶ地域の大人の学びも大きいことが期待できる。

Step1 子ども食堂活動現場での実践 みんなで救い出せた、食品の重さを計って貢献を共有する

日本国内で10000ヶ所を超えた子ども食堂。併せてフードパントリー活動を行っているところも多い。活動はボランティアなもので、基本的に広く参加者を受け入れており、子ども食堂ネットワーク北九州に所属する子ども食堂は、概ね月1回以上の活動を行っている。自由度は高いが、多くは小さな組織で不安定で、脆弱である。地域の気づいた人々が様々な形で、活動を支えており、多様な関わり方が可能な活動現場である。個々に様々な個性があり、それらが強みではあるが、配慮が必要な状況がそれぞれにあり、ひと括りに規定された価値観や方法で、活動を実践することは難しい。子ども食堂を緩やかに繋ぐネットワーク組織などを経由し、現場で安全に、楽しく活動するために、活動そのものを丁寧に調整し、着地させていくための支援が必要。

食べたり、持ち帰ったりしてレスキューした食品について学び合う。(体験的に食品のことを知る)

フードパントリーで食品を目視しながら、ロスになりそうな食品の背景について知る。(調理済食品は通常持帰り不可)

食品ロスのレスキューをみんなで記録する 実際の引き取りの計測記録を行う。(重さ、として取り組みを見える化する)

竹100%竹肥姫の生ゴミコンポスト活動の普及を図る(ゆるくてたのしい、短期間の生ゴミ減容体験の普及)

既存の地域活動は、縦割りに設計されているため、その境界を越えるのが現場では難しいことが多いが、子ども食堂はそれを乗り越えやすい。高齢者専用の食べる機会への若者世代との交流機会を生み出し共に考えてみるなどが有効。活動準備の段階から、基本的な仕組みと遵守事項の確認と、仲間作りと、実践とが繰り返され、学び深い取り組みとなる。

のんびり取り組めるコンポスト活動は、高齢者のゴミ出し問題の解決に結びつく。レスキュー量を計測・積算・公表するなど。

7. 横展開へのポイント (2/3) 学校等

学校給食の学びの場としての可能性は大きい。子どもたちにとっては、学校の給食が、全員に等しく機会提供され、一番よく見えているので、給食の分け方や、残食の扱いについて子ども達と一緒に考えて、取り組むことは、「なかまとわけあって、食べ物を大切に、ロスを減らす」ことを実践する非常に有効な機会である。教科学習としても、横断的に取り組みが可能な小学校や、高校の探求科目での取り組みにおいて可能性が大きい。保育園や放課後等デイサービスは、生活を共有する機会が多く、カリキュラム的にも緩やかなので、毎年連続性のある取り組みとして、コンポスト活動を導入しやすい。

Step 2 学校など、子ども達の集まる場所での実践

Step 3 支援の必要な子どもたちのためには、放課後等デイサービスなどでの取り組みが有効

学校は管理されていて、自由度は低いが、毎日子どもたちが通い、給食をみんなで食べ、仲間と学ぶとても大切な場所である。「残さず食べる」を個々に強いるのではなく、「どうしたら、みんなで協力して分け合って、食べ切ることができるのか？」という子どもたちの試みを応援したい。集めるだけのフードドライブは、取り組みやすい。

今回のヒアリングの中で、見えてきた各学校の給食の配膳やわけあいについての取り組み状況は、市区町村の教育委員会単位、学校単位、クラス単位で、大きく異なることがわかっている。給食そのものの仕組み（自校式かセンター方式か、食品調達の仕組み、調理員さんや調理委託の状況など）が大きく異なるため、学校ごとに実現可能な方法を工夫する必要がある。学校給食の可能性は大きい。なんでも学校へ、は現実的ではないが、各家庭では学ぶことができない、仲間との取り組み機会として大変重要。もくも給食（インフルエンザの流行時などに、一人ずつ個別の席配置のまま、一切会話をせずに食事を取る）などを見直し、食についての学びの機会、みんなで分け合う機会として、見直していきたい。

非常に忙しい学校現場での学習カリキュラムの中に、取り組みを科目横断的に自由度を大きく持たせて、実践の状況に併せて配置していくためには、実践活動を支える、専門的な知識のある人材の参画が必要。

コンポスト活動を行う際に、投入する野菜クズ、食品残さをどう手配するか、という点は学校によって工夫が必要。今回、高校でのコンポストの取り組みの際、学食（民間委託）の野菜クズ、を減容するという活動が実施できた学校とできなかった学校、調理実習の野菜クズを全てコンポストに投入した学校と、調理実習自体がほとんどない学校があった。双方、職員室から出る、コーヒー殻は、どこでも活用できた。職員室もオフィスであり、企業のオフィスでも同じ取り組みは可能なはずである。それぞれの学校の事情に合わせた取り組みが実施できている。小規模のデイサービス、（特に18歳までの子ども用の放課後等デイサービス）は規模が大きく余裕のない学童保育などより、取り組みやすいはずである。高校や大学も、毎日何らかの食事提供を行なっているケースが多く、学生自身が自活し始めるタイミングでもあり、生活実践の中で学びを深めるチャンスである。

食ロス削減推進サポーター（消費者庁）・食品ロス削減マイスター（福岡県福岡県環境部 循環型社会推進課）の活用（特別講師派遣などの仕組みの周知と充実）研修を受けている活動者がおり、非常にわかりやすく、テキストも充実していると好評。一定規模の学校や社会教育施設、福祉施設、塾やスポーツ団体などの指導者に学びを届ける工夫を行いたい。

7. 横展開へのポイント (3/3)

地域のお祭りや、子ども向けのイベント会場での、啓発と参加機会の提供は、日常生活で食品ロスのことを学ぶ機会がない子どもたちや、地域の人々に、広く知っていただくチャンスである。(学校に通っていないなくても参加できる。子供だけでも参加できる) イベントブースとしての出展も、学校内や近隣地域であれば低予算での実施が可能で、学びと練習からはじめ、取り組み自体を計画し準備する過程での学びも大きく、多世代のボランティア活動の入口としても、お勧めしたい。

Step4 イベント会場での啓発展示、体験参加機会の創出

イベント会場 校内の文化祭や学園祭、キャリア体験イベントや子ども祭りなどにおいて、食品ロスについての学びを含めた参加機会として、フードドライブボックスの展示やフードパントリーを行う。実際の食品を目にしながらか、知ることを励ます、クイズなどたのしみながら参加することができる機会となる。

クイズなどで、知ってもらふことに参加してもらふ
アンケート協力を依頼し、「まず、何をすればいいかが学べる、アンケート」を工夫する
可能ならばフードパントリー活動体験に参加してもらい、食品ロスの現場や、地元食材や企業の取り組みを地域で共有する機会をつくる
子ども食堂活動の取り組み状況の発表伝達などを行う(どこで活動しているか、伝える)
シールラリーやビンゴなど、学びながら楽しめる機会を作り、参加賞としてで今後も伝えることができる何か(カードや缶バッチ、エコバッグなど)を準備すると今後への意識づけにもつなげられる。

1gでもレスキューできたことを、積み上げながら励まし合い、うまくいかなかった?なんで?も、前向きに共有する。みんなできとりくむ活動であることを、大切にする。

合わせて、周辺で活動している、子ども食堂やフードパントリー団体の直近の活動情報を提供する。(近所がない、近所だと参加しにくい、という両方の状況がある。活動拠点によって雰囲気も場所や時間帯も様々なので、なるべく多くの活動を紹介できる方がよい)可能であれば、行政の協力を得て、個別の相談などを受けることもおすすめ。

それぞれの実践をもちより共有し、お互いの気づきやたのしみを、分かち合うことで、さらに活動が面白くなる。各地の取り組みを共有できる機会、(よくできたものだけを表彰するのではなく、みんなの一步を共有し合う機会)を創出する。